キルケゴール著作集

第18巻

わが著作活動の視点

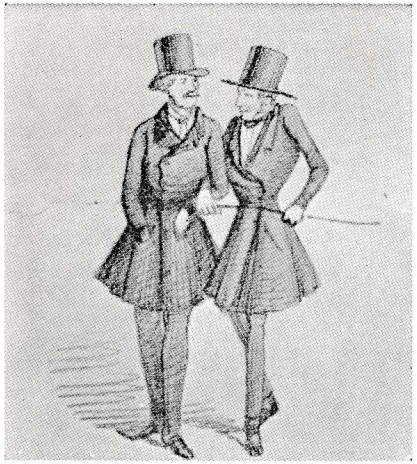
田淵義三郎訳

・

野の百合・空の鳥

久山　康訳

白水社



P. クレーストルップ画．キルケゴール（右）と友人の散歩．この画の下には次のように書かれていた．
「ぼくは，泥炭採取をする農民たちにとり入る特別な才能を持っている」

M. ルン画

北シェラン（ジーランド）の自然風景
『野の百合・空の鳥』はこの地方の自然を背景として書かれた

目次

わが著作活動の視点 …… 九
序論 …… 二
第一篇 …… 一七
A 著者は美的著作家なのか、それとも宗教的著作家なのか、という全著作活動における二義性、または二重性 …… 一八
B 著者が宗教的著作家であり、またそうであったということの説明 …… 三
第二篇 著者は宗教的著作家である、との視点の下に全著作活動を解明する …… 三
第一章 …… 三
A 美的著作 なぜ美的著作をもって始められたか、あるいは全体的にみてこの著作は何を意味するか …… 三

与するかについては十分気をつけていやしくも完全燃焼をすることがかえって非真理を広めることにならないよう十分気をつけて見張っていることが肝要である。名義だけのキリスト者の大量生産をやったり、幾百万人にわれこそはキリスト者であるということの自信に支柱を与えたりすることが私の課題でもなければ、「キリスト教界」においてもそれは真の課題とはなり得ないであろう。しかり、課題とはまさにこのひがごとを明るみにさらすことなのだ。ひがごととはキリスト教のための粉骨砕心という美名にかくれて、教会のおえら方や牧師やおざなり主義の利益のためにこれら幾百万人を骨抜きにしたことをさす——なんという狡さ！　このひがごとを明るみに出して隈なく照らし「教界」におけるキリスト教的粉骨砕心とはその実キリスト者の幾軍団よりキリスト教を追いはらうという亡恩的なおこない——この亡恩的なところにすなわちキリスト教的な目じるしがある。ちょうどその反対の俗世間の目じるしが「利益」であるように——をはっきりさせねばならない。

最後にただ一言付け加えたい。キリストにはいうまでもなく弟子があり、また人間的な例をとればソクラテスにもまた弟子があった。しかし次の意味ではキリストにもソクラテスにも弟子がなかった——倫理的、倫理・宗教的には衆は非真理であり、衆と数をたのんで働きかけ、数をもって何が真理であるかの審判としようとすることは非真理だという、私が提起したこの命題が非真理となるような意味においては。

野の百合・空の鳥

久山康訳

第一部

序言

この小さな書物は（それが現われるにいたった事情、すなわち、『あれか、これか』の第二版への序論として現われるにいたったという事情を顧みるとき、私の最初のもののことを、ことに私の最初のものに対する最初のもの、すなわち、『あれか、これか』の直後に出た一八四三年の『二つの教化的講話』の序言[1]を思い起こさせるのであるが、）この小さな書物は私が喜びと感謝とをもって私の読者と呼ぶかの単独者に、同一のことを思い起こさせるなら幸いである。この書物は人に知られず生まれ出たように、今もなお人に知られずにあることを願っている。ちょうど大きな森の片陰に咲く小さな花のように。それはこの書物が『あれか、これか』の新版に続いているという事情によって気づかれるであろう。しかしもしこの書物によって私のことを覚えている人々が、一八四四年の『二つの教化的講話』の序言を思い起こしてくれるならいっそう幸いである。それは匿名の著作が今も昔も左の手[2]で差し出されているのに対して、右の手で差し出されているのである。

一八四九年五月五日

セーレン・キルケゴール

(1) 〔訳注〕一八四三年の『二つの教化的講話』の序言は次のようにしるされている。

「この小さな書物は(『講話』と呼ばれて、説教と呼ばれていないが、それは、その著者が**説教**する権能をもっていないからである。『教化的講話』と呼ばれて、教化のための講話と呼ばれていないが、それは、講話者が教師たることをけっして要求しないからである)、あるがままのもの、つまり余計なもの、でありたいと願うだけであり、ひそかに出来上がったように、いつまでも隠れていてくれるように熱望するばかりであるけれども、しかしわたくしはこの書と別れを告げるには、ほとんど空想的ともいえる希望を託さずにはいられなかった。この書は出版されて、比喩的に言えば、いわばさすらいの旅路につくのであるから、わたくしはしばしの間、わたくしの目でその行く手を追っていた。すると、寂しい道を歩いて行くのが見えた、また寂しげに国道を行く姿が見えた。ほんのわずかばかり似ているところがあるために間違えられてしまって、少しばかりあれこれと誤解を受けはしたが、ついにこの書は、わたくしが喜びと感謝をもってわたくしの読者と呼ぶあのひとりの人に、この書がいわば両手をひろげて差し出すあのひとりの人に、たとえ出会った瞬間にその出会いが喜ばしく頼もしいものであろうとも、それとも、《ものうく憂いに満ちた》ものであろうとも、親切にも会ってくれ、親切にもこの書を受け取ってくれるあのひとりの人に、出会ったのであった。——ひるがえって、また、この書は、出版されても、ほんとうの意味で言えば、黙って動かずにいて歩み出すわけではないから、わたくしはしばしの間、わたくしの目をこの書の上にそそいでいた。すると、この書は、大きい森の人知れぬところに咲いた一輪の名もない小さな花のように、その華麗さで人の目を引くこともなく、その芳香で人を誘うこともなく、またその栄養分のゆえに人に捜し求められることもなく、そこに立っていた。しかしわたくしはまた、わたくしがわたくしの読者と呼ぶ小鳥が、突然その小さい花を見つけ、翼にのって舞いおり、摘み取り、運び去って行くのを見た。そして、それを見てしまった後は、わたくしにはもう何も見えなかった。」(桝田啓三郎訳『キルケゴール全集』第五巻二一三ページ—二一四ページ)

この序言の中の「あのひとりの人」というのは、キルケゴールの許婚者であり、真実に愛しながらなぜか破約したレギーネを暗にさしているものといわれる。かれは自分の恋愛関係が特有のものであって、恋人になることからはじめて牧師となることで終わったと日記にしるしているので、この講話を通してレギーネの牧師となるという、すなわち、彼女の精神的指導者になろうという意図を秘めていたように思われるのである。そしてここに初めて出てくる「あのひとりの人」という言葉が、後には個人的意味を脱して「単独者」というかれの思想を形成する基本概念の一つになったことはよく知られている。

(2) 〔訳注〕旧約聖書では「右手」は神の祝福を授ける手として考えられた。たとえば創世記四八の八—一九には、ヤコブが自分の子であるヨセフの意に反して、ヨセフの長子マナセよりもその弟エフライムの頭に右手をおいて祝福し、マナセには左手をおいて祝福したため、ヨセフは不満としたという記事が出ている。キルケゴールはこういう旧約の考えを受けついで、神の祝福を伝える信仰的講話は右手で差し出し、左手では美的著作を差し出したと考えたのかもしれない。しかしまた「左手」と「右手」ということに関しては『哲学的断片のあとがき』にレッシングの次の言葉が見られる。「もし神が右手にはすべての真理を、左手には真理を求めてやまぬはげしい欲求を、これに永久の迷いをそえて、黙って差し出し、そしてわたしに向かって、どちらかを選べ、と言われるならば、わたしは謙虚に、神の左手にすがり、父よ、こちらをお与えください、純粋な真理は、ひとりあなたご自身だけのためにあるものですから、と言うであろう。」キルケゴールはあるいはこのレッシングの言葉を意識において、いまだ信仰に到達しないで迷

いの中にある美的立場を「左手」で、そして信仰の立場を「右手」で表現しようとしたのかもしれない。なお注（1）と（2）の事項については桝田訳『キルケゴール全集』第五巻の注に詳細で優れた解説があるので参照されたい。

祈禱

天にいます父よ、私たちが人間の社会的な交わりの中で、ことに人間の群集する中で知ることがきわめて困難であり、たとえどこか他のところで知りえたとしましても、すぐさま忘れ去りますのは、人間であることは何を意味しており、また人間に対する神の要求はなんであるかということでございます。しかし私たちはそのことを百合と鳥より学ぶことができますように。あるいはそれが忘れ去られましたときには、繰り返し学ぶことができますように。私たちが一度にしかも全部を学ぶことができないようでしたら、そのいくらかをしかも次々に学ぶことができますように。私たちはこの度は鳥と百合から沈黙と服従と歓喜とを学ぶことができますように。

聖霊降臨節後第十五回目の日曜日における福音

人は二人の主に兼ね事うること能わず、あるいはこれを憎み彼を愛し、あるいはこれに親しみ彼を軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事うること能わず。このゆえに我なんじらに告ぐ、何を食

い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙かに優るる者ならずや。汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。またなにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合はいかにして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。是みな異邦人の切に求むるところなり。汝らの天の父は、すべてこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。まず神の国と神の義とを求めよ、さらばすべてこれらの物は汝らに加えらるべし。このゆえに明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。

一　空の鳥を見よ、野の百合を観よ

しかし汝はおそらく「詩人」とともに言うであろう。（しかも詩人がそう語るなら、とくに汝の意にかなうのであるが、）「ああ、私は鳥であればよいのに。あるいは旅を好んで、身もはるばると雲煙万里の天の涯まで飛んでゆく鳥のようであればよいのに。しかるにその私は心労と苦悩と困惑とが毎日毎日、私の生涯のあらゆる時に、息も継がせず襲ってきて、私がそこに住んでいることを意識させずにはおかないような場所に、縛りつけられ釘づけにされているのを感じる。ああ、私はあらゆるこの世の煩いよりも軽やかに、否、大気よりもさらに軽やかに、空高く翔け昇る鳥であればよいのに。私は身の軽い鳥のようであればよいのに。鳥は憩いの家を求めるときには、その巣を蒼海の鏡の上にさえつくるのである。それなのに私は、ただ微かに動いても、それがどんなに小さな身動きであっても、重い軛を負わされているのを感じる。ああ、私は鳥であればよいのに。あるいは鳥のようであればよいのに。だれひとり耳を傾けなくても謙虚にうたい、だれひとり耳を傾けなくても誇らかにうたう小さな歌手のように、すべての思い煩いから自由であればよいのに。ああ、その私は自分のために用いる一瞬をも一物をも持ちあわせてはいない。私は千万の思い煩いに心を砕いて、自己を寸断しなけれ

ばならないのだ。ああ、私は花であればよいのに。あるいは幸福にも自分に自惚れ、それで終わりである草原の花のようであればよいのに。ああ、その私は人間の魂の分裂が自分の中にも口を開いているのを感じる。私は自己を愛するためにすべての人と絶交することもできなければ、また他の人を愛するためにすべてを投げ棄てることもできない」と。

このように詩人は語る。われわれがただかりそめに耳を傾けるなら、それは福音と同一のことを告げているように聞こえる。詩人は実際最も強い表現で鳥と百合との幸福を讃美しているのであるから。しかしもっとよくお聴きなさい。「それだから、百合と鳥とを福音が讃めたたえて、おまえも真にそうあるべきだと言うなら、福音は無慈悲であるともいうべきである。私がそうあるべきであるというのか。ああ、空の鳥、野の百合のようであったらという願望が、このように真実で、真実で、真実であるこの私が。ところが私がそうなることは全然不可能なのである。それゆえにこそその願望はこのように心の奥底より迸り、また痛切であり、さらに燃えるように熱いのである。それだのにそのように私に告げるとは、福音はなんと無慈悲なことであろう。私はまさしく私の熱い願望の中で、私が現在そうでもなく、未来もそうありえないことを深く感じているのに、そういうものになるべきだというのは、実際私を発狂させようとするにも等しい。私は福音を理解することができない。それは異国の言葉を聞くのと同一である。もし私が福音を理解せねばならないなら、福音は私を殺すであろう」と。

詩人は福音とたえずこのような関係にあるのである。福音が幼児のごとくあれと告げるなら、詩人

は答えて言う。「ああ、私は幼児のごとくになれたらよいのに。幼児のごとく無邪気で嬉々として喜ぶことができればよいのに。ああ、その私はこんなに早く年老いて汚辱に染まり、倦み疲れてしまった」と。そのように詩人は語る。しかも一般では詩人は幼児であると言われていて、それも決して間違いではないのである。しかるに詩人は福音と一致することができない。なぜなら詩人の本質的な前提は、その願望が達成できないものと絶望しているところにあるからである。この絶望こそ「願望」を生み出すのである。しかし願望は慰めなきことから生まれた作り事である。願望はあるいは一瞬慰めるかもしれない。しかしさらによく注視するならば、願望は慰めをもたらさないことを知るであろう。それゆえ願望は、慰めなきことが作り出す慰めであるといわれるのである。なんという驚くべき自己矛盾であろう。しかしこの自己矛盾こそ実は詩人なのである。詩人は母にとってはベノニであるが、父によってはベニヤミンと呼ばれるのである。[3] すなわち、苦痛の子であると同時に歓びの子である。苦痛の中から詩人に願望が生まれる。そしてこの願望、この燃えしきる願望は、人の心を美酒にもまさって喜ばすのである。——あるいは春の初花にもまさって、あるいは昼に倦みはてた人々が夜を憧れて、喜び迎える宵の明星にもまさって、あるいは夜が明けそめて人々が別れの挨拶を目くばせする夜明けの明星にもまさって、人の心を喜ばすのである。詩人は永遠性の幼児である。——永遠性のもつ真摯さを欠いてはいるが。詩人は鳥や百合のことを思って涕泣する。そして詩人は涕泣することによって涙の中に宥めを見いだすのである。こうして願望が生まれ、その願望が詩人を雄弁にする。「ああ、私は鳥であればよいのに。私が幼い時絵本で見た鳥であればよいのに。ああ、私は野の花であ

ればよいのに」と。しかしもしだれかが福音に共鳴して、鳥が真に教師であるというのは真摯なことであり、まさしく真摯なことであると詩人に言いでもしようものなら、――詩人は笑い出すに違いない。そして詩人は鳥と百合とを使ってしきりに冗談を言うのである。しかもそれは非常に機智に富んでいるので、詩人はわれわれすべてを（どんな真摯な人々をも）笑いに誘うのである。しかしそれによって詩人は福音になんの感銘も与えるわけにはゆかない。福音は非常に真摯なので、このうえもなく真摯な人をも変化させた詩人の哀愁も、これを変化させることはできないのである。その真摯な人は一瞬譲歩して詩人の考えに従い、かれとともに溜息をつきながら言うのである。「君、それはほんとうに君にとって不可能なことなのか。もしそうだったら、私は当然君に、そのようにあるべきだとは言いえないだろう」と。ところが福音には、鳥のごとくあれと、詩人に対して命じることが許されているのである。しかも福音はきわめて真摯なので、いかに打ち勝ちがたい詩人の虚構といえども、微笑に誘うことはできないのである。

（1）〔訳注〕旧約聖書創世記三五の一六―一八に出てくる記事をさしている。「こうして彼らはベテルを立ったが、エフラタに行き着くまでに、なお隔たりのある所でラケルは産気づき、その産は重かった。その難産に当たって、産婆は彼女に言った、『心配することはありません。今度も男の子です。』彼女は死にのぞみ、魂の去ろうとする時、子の名をベノニ（吾苦痛の子）と呼んだ。しかし、父はこれをベニヤミン（右手の子）と名づけた。」「右手」というのは前出のように、神の祝福を授ける手を意味しているので、苦痛の子でありながら同時に神の祝福を受ける子という自己矛盾を示しているわけである。

汝は飜って幼児に成らねばならぬ。そしてそのためには、あるいは結局は、だれも幼児を目当てにしているような言葉で、どんな幼児にも理解される言葉、すなわち、「汝為すべし」という言葉を、汝が理解しうるようになり、また理解しようと欲するようになることから始めなければならない。汝はこの言葉を、幼児が理解するとおりに理解しなければならない。幼児は決して理由を問わない。幼児は理由を問うことを許されていないし、また幼児にはその必要もないのである。――しかもこのことは互いに相応じている。すなわち、幼児は理由を問うことが許されていないそのために、理由を問う必要もないのである。幼児にとっては、為すべしという一事で十分なのである。実際、あらゆる理由を一緒にしてみても、幼児にとって為すべしというほどの理由には達しないであろう。しかも幼児は、「私にはできない」とは決して言わない。できないと言うことは幼児に許されてもいないし、またそう言うことは偽りでもある。――このことは互いに相応じている。すなわち、「私にはできない」と言うことが、幼児に許されていないというそのことのために、できないということはまた真実ではなくて、できるということが真実として明らかとなるのである。もし人はそれ以外になりようがないなら、できないということは不可能である。しかし幼児は決して遁辞や弁解を捜し求めはしない。むしろ幼児は恐ろしいほどの真実さをもって、いかなる遁辞も弁解も存在しないことを理解しており、この「汝為すべし」という言葉から身を隠しうる隠れ場は、天にも地にも家の内にも外の庭にも存在しないことを理解しているのである。しかしもしこのような隠れ場の全然存在しないことが、一目瞭然であるならば、逃げ道も遁辞もこれまた全然存在しないのである。そしてもし恐ろしいほどの真実さを

もって、逃げ道も遁辞も全然存在しないことが明らかとなるならば、——実際そうなるならば、もちろんそれを捜し求めはしない。そして自己の為すべきことが為されるのである。しかも幼児は長く熟慮することを要しない。もし幼児は為すべきことがあるならば、しかもおそらくは即刻為すべきことであるならば、熟慮する機会など全然ありはしない。よしたとえ熟慮する機会が与えられたとしても、幼児は為すべきことは為さねばならないのである。どうしても為すべきであるなら、——実際人々が幼児に対して熟慮するために永遠の時を与えたとしても、幼児はそれを必要としないで、むしろ言うであろう。われわれがどうしてもしなければならないものなら、なんのためにこれらのすべての時間は存在するのであるかと。それにもかかわらず、もし人々が幼児に時間を与えてやるなら、幼児は他のことにそれを用いるであろう。すなわち、遊んだり、たのしんだりするために用いるであろう。なぜなら、幼児は自分の為すべきことは当然果たさねばならないからである。それは確固不動のことであって熟慮となんの関係もないことである。

それでは福音の指図に従って、百合と鳥とを教師として観てゆこう。真摯に！　なぜなら福音はあまりにも霊的であるために、百合や鳥を必要としないということもなければ、反対にまたあまりにもこの世的であって、百合や鳥をただ悲しそうに観たり、笑いながら観るということもないからである。

……

われわれは百合と鳥とを沈黙の教師として観てゆこう。われわれはかれらから沈黙することを学ぼう。

なぜなら人間が動物より優っているのは、たしかに語ることによってである。従って人がそう考えたいならば、百合よりもはるかに優ったものでありうる。しかしたとえ語りうることが優越点であったとしても、それからただちに、沈黙しうることが技倆でないとか、あるいは取るに足らぬ技倆にすぎぬというような結論は生まれはしない。反対に、人間は語りうるそのために、沈黙しうることが技倆なのである。しかしこの優越点が人間をきわめて誘惑に誘いやすく、そのために、沈黙しうることは偉大な技倆である。しかし人はそのことを沈黙せる教師、百合と鳥から学ぶことができるのである。

「先ず神の国とその義とを求めよ。」

これはどういう意味なのであろうか。私は何をしたらよいのであろうか。あるいは神の国を求めていると言いうるような努力とは、どのような努力なのであろうか。私は働くために私の力と能力に応じた職を求めるべきであろうか。否、先ず汝は神の国を求めなければならない。私は持ち物をことごとく貧しい人々に与えるべきであろうか。否、先ず汝は神の国を求めなければならない。私はこの教えを伝えるために、世の中に出てゆくべきであろうか。否、先ず汝は神の国を求めなければならない。しかしそうであるなら、或る意味では為すべきことは何ひとつ存しないのではあるまいか。然り。そこには或る意味で為すべきことは何ひとつ存在しないのである。なぜなら汝は最も深い意味において汝自身を無とすべきであり、神の前において無となるべきであり、沈黙することを学ぶべきであるからである。この沈黙するということが発端であり、沈黙のうちに汝は先ず神の国を求めるのである。

このようにして人々は、事柄を神の考えられるように理解して、いわば後戻りして発端へ来るので

ある。発端は人々がそこから始める場所ではなくて、そこへとおもむく場所である。そして人々は後戻りして発端に達する。発端は沈黙したものとなるというこの技倆である。なぜなら人が自然の沈黙しているように沈黙していることは、決して技倆ではないからである。そしてこのこと、すなわち、そのように最も深い意味において沈黙したものとなること、神の前に沈黙したものとなること、それは神を畏れ始めることである。なぜなら神を畏れることと共に知恵が始まるように、沈黙とともに神への畏れが始まるからである。そして神を畏れることが、知恵の始まり以上のもの、すなわち、知恵そのものであるように、沈黙は神を畏れ始めることより以上のもの、すなわち、神への畏れそのものである。この沈黙の中では神を畏れて、願望や渇望の多くの思いが口をふさいでいる。この沈黙の中では多くの感謝の言葉が口をつぐんでいるのである。

語りうるということは、動物に対する人間の優越点である。しかし語ることのできる人間も、もし語ろうとするなら、神との関係がすぐに腐敗するのである。神は天にいまし、人は地にある。従って神と人とはともに仲よく語りあうことはできない。神は万物を知ろしめす方であるのに、人はただくだらぬ譫言を知っているにすぎない。従って神と人とはともに仲よく語りあうことはできない。神は愛であり、人は（幼児がそう言われるように）自己の幸福についてさえ全くの愚か者である。従って神と人とはともに仲よく語りあうことはできない。ただ烈しい畏れと戦きの中でのみ、人は神と語りうるにすぎない。ただ烈しい畏れと戦きの中でのみ。しかし烈しい畏れと戦きの中で語るということは、或る他の理由から困難である。不安が声を詰まらせるように、畏れと戦きもまた言葉を殺して沈

黙させてしまうのである。正しく祈る者はそのことを知っている。そしてまだ正しい祈りを知らぬ者は、まさしく祈りにおいてそのことを学ぶであろう。祈りの中にはかれにとってきわめて重大な事柄が存在していたのである。そして神を正しく理解するということは、かれにとってこのうえもなく重大なことであったのである。かれは祈りの中で大切なことを思わず忘れていたのを怖れたのである。しかもかれがそれを忘れていたときにも、神ご自身はそのことを憶えていたもうたのではなかったかを怖れたのである。そこでかれは真に心の底より祈るために自己を集中しようとしたのである。しかしもしかれが真に心の底より祈ったならば、かれには何が起こったであろうか。かれには不思議なことが起こったのである。すなわち、かれがその祈りの中で内面的になればなるほど、いっそう言葉少なくなり、ついには沈黙したのである。かれは沈黙した。実にかれは語ることに対して最も鋭い対立の中に入り込んだのである。すなわち、かれは傾聴したのである。かれはかつて祈ることは語ることであると考えていた。しかし今や祈ることは単に沈黙することに止まらないで、聴くことでもあることを学んだのである。実際にまたそうである。人は自分が語っているのを聞いているかぎり、祈ってはいない。語ることをやめて、神の語りかけ給うのを黙って待つようになったとき、人は初めて祈っているのである。

それゆえ「神の国を求めよ」という福音の言葉は、人間を教育するために、いわばあれを為すべきかこれを為すべきかというすべての問いに対して、ただ「先ず汝は神の国を求めよ」と繰り返して答えることによって、人間の口をつぐましめるのである。それゆえ人は福音の言葉を次のように書きか

えることもできるのである。汝は祈ることから始めなければならない。――なぜなら祈りは沈黙と同時に始まるのではなく、それが正しい祈りとなるならば、祈りが沈黙の中で終わるからである。「先ず神の国を求めよ。」それは実に祈れということを意味している。もし汝が自分はかくかくのことを為すべきであるのか、また自分がそれを為せば神の国を求めることになるのかどうかと問い、そしてかく問いながら手当たり次第にいろいろのことをやってみるなら、汝には、そうではない、汝は先ず神の国を求めなければならないという答えが与えられるにすぎないであろう。しかるに祈ることは（すなわち、正しく祈ることは、）静かになることを意味しており、そしてそれは先ず神の国を求めることを意味しているのである。

その沈黙を汝は百合と鳥のもとで学ぶことができる。すなわち、かれらの沈黙はむろん技倆といわるべきものではないが、もし汝がかれらのごとく沈黙することを学ぶなら、汝は発端に立っているのである。先ず神の国を求めているのである。

戸外の神の知ろしめす空の下、百合と鳥のもとには、なんという荘厳さが漂うていることであろう。なぜであろうか。詩人に問うてみよ。詩人は汝に答えるであろう。そこは静寂であるからだと。そして詩人は荘厳なる静寂を憧れて、喧騒きわまる人間どもの世界の世俗性を離れようとする。すなわち、語りうることによって動物より優れていることを、ただ悲しむべき仕方でのみ証するにすぎないこの世俗的人間生活の一切を離れようとする。「いったい」と詩人は言うであろう。「それは優越を意味するのであろうか。否、私は戸外の静寂がはるかに好きだ。私は静寂が好きだ。――否、それどころで

はない、実際、そこには比較の入るべき余地など存在しない。静寂は語ることのできる人間よりも無限に優れている」と。自然の沈黙の中で詩人はつまり神の声を聴き取るように思うのである。人間の興奮した話合いの中では、詩人は神の声を聴かないばかりか、人間が神聖なる種族であることを、いまだかつて感知したこともないと信じているのである。詩人は言う。語ることは動物に対する人間の優越点である、もし人間が沈黙することができるならば、と。

しかるに、その沈黙するということを、汝は戸外の百合や鳥のもとで学ぶことができる。そこには沈黙が存在しており、かつまたこの沈黙の中には或る神々しいものが存在している。戸外には沈黙が存在している。しかも万物寂として声なき夜のみならず、幾千もの弦の鳴り響くような騒々しい昼においても、あるいはまた海原がわれわれのまわりで吼え猛る時でさえも、戸外には沈黙が存在している。しばしば騒々しくさえあるこれらのものも、きわめてよく沈黙することを理解しているので、それらのものは何ひとつ沈黙を破らないばかりでなく、すべてがより集まっても、荘厳な沈黙を破らないのである。戸外には沈黙が存在している。森は沈黙している。ざわめくときでさえ森は沈黙している。木々は、非常に密生しているところにおいてさえ、人々がしばしば偽りの誓いを立てて、「口外しない」と言うその誓いを互いに守っている。海は沈黙している。それは狂乱怒号するときでさえ、沈黙している。初めの一瞬間、汝はおそらく聴き誤って海が荒れ狂うていると思うであろう。しかしそれでは海を正しく理解したことにならないのである。反対にしばらくの間耳を傾けて十分聴き入るなら、（なんという不思議なことであろう！）汝はそのとき沈黙を聴くのである。この単調な轟きは何ひ

とつ語ってはいない。もし黄昏に沈黙が曠野の上に拡がり、汝がただ遠くに獣の唸り声や犬の吠えた声を聞くならば、それらの声は決して沈黙を破りはしない。否、かえってそれらはともに沈黙に帰属して、沈黙と神秘な同一を遂げ、それをただ深めるのみである。

それではわれわれの真に学ぶべき百合と鳥とをもっと詳細に観察しよう。鳥は黙って待っている。鳥は知っている。あるいはもっと正しくいうならば、鳥は固く信じている。すべてのことが適当な時に起こることを。——そのために鳥は待っているのである。しかもその時と時刻を知ることは、自己の分ではないことを鳥は知っている。——そのために鳥は沈黙しているのである。きっとすべてのことは適当な時に起こるであろうと鳥は言う。いや、そうではない。鳥はそう言わないで黙っている。しかしその沈黙が雄弁なのである。鳥のこの沈黙は、鳥がそれを信じていることを告げている。実際、鳥はそれを信じていればこそ、黙って待っているのである。こうしてその瞬間が訪れるならば、沈黙せる鳥は、これがその瞬間であることを理解し、これを利用して羞らうことが決してないのである。百合もまた同様である。百合は黙って待っている。「いつ春が来るのか」と百合は性急に問いはしない。——なぜなら、百合はそれが適当な時に来ることを知っているし、またたとえ百合が季節を定めえたとしても、それは百合自身にとってなんの役にも立たぬことを知っているからである。百合はまた言わない、「いったい、いつになったら雨が降るのであろうか」とか、あるいは「いったい、いつになったら天気になるのであろうか」と。あるいは「今はもう嫌というほど長く雨が降った」とか、あるいは「もう暑さはたくさんだ」と。百合は前もって、今年の夏はどうなるであろうか、長いか、短

いか、あるいはどんなに乾燥するか、また湿潤であるか、と問いはしない。否、百合は沈黙して待っている。このように百合は単純である。しかし百合は決して欺かれはしない。——欺かれるのは小賢しいもののみであって、単純なものではない。単純なものは欺きもしなければ、欺かれもしない。このようにしてやがてその瞬間が訪れる。そしてやがてその瞬間が訪れるならば、沈黙せる百合は、今ここにその瞬間が訪れていることを理解して、それを利用するのである。ああ、汝ら深慮ある単純の教師たちよ、いったい人が語る場合でも、「その瞬間」に出あいうるであろうか。人は語ることによってただの二、三語を語っただけでさえ、その瞬間を失うのである。ただ沈黙の中にのみ瞬間は存在する。それゆえ、人間は瞬間がいつそこにあるかを正しく理解して、それをまた正しく利用するということがほとんどできないのである。人間が沈黙しえないというそのことのために、人間は黙って待つことができない。もし人間に総じて瞬間が訪れて来ないなら、それはおそらく人間が沈黙しえないということから説明されるであろう。そのことからまた瞬間がかれのもとに訪れたとき、それに気づかなかったこともおそらく説明されるであろう。なぜなら瞬間はたとえ豊かな意味を自己に蔵していても、決して自己の到着を告げるために、前触れをしないからである。その上瞬間の訪れるや、それはあまりにも速やかである。実際、そのとき瞬間は自己を告げ知らせるために、一瞬の時をも有してはいない。そして瞬間はそれ自身きわめて重要な意味を有しているにもかかわらず、喧騒や叫喚を伴ってやってきはしない。むしろひそやかに、最も身の軽いものよりもさらに軽やかな足取りで——不意なものの軽い足取りでやって来るのである。瞬間は忍びやかに訪れて来る。それゆえ、瞬間の到来を

感知しようと思うなら、きわめて静かにしていなければならない。しかも一瞬にしてその瞬間は過ぎ去ってゆく。それゆえ、もし巧みに瞬間を利用すべきであるなら、きわめて静かにしていなければならない。しかも万事は瞬間に懸かっている。しかるにほとんどすべての人間の生活においては、時間と永遠とがその中で相触れる瞬間が感知されず、従ってかれの生活において、時間的なるものと永遠なるものとが互いに分離していることは、たしかに不幸であるに違いない。それではなぜかれらは瞬間を感知しなかったのであろうか。それはかれらが沈黙しえなかったからにほかならない。

鳥は黙って悩んでいる。何が鳥の心を苦しめようとも、鳥は沈黙している。鳥は荒野の孤独の中でうたい始める陰鬱な歌においてさえ、沈黙している。鳥は三度溜息を吐き、そしてまた沈黙する。次にまた三度溜息を吐く。——しかし本質的には鳥は沈黙しているのである。なぜなら鳥は何が自己を苦しめるのかを告げ知らせもしないし、悲嘆にくれもしないし、まただれに哀訴するのでもないから。鳥は溜息を吐いては、また沈黙する。それはあたかも鳥が沈黙に圧倒されようとしているかのようである。それゆえ鳥は溜息を吐く——沈黙するために。鳥は決して苦悩から解放されているのではない。しかし沈黙せる鳥は苦悩をいっそう烈しくするものから、——誤解にもとづく他人の同情から、すなわち、苦悩を永くするものから——解放されているし、また苦悩についての多くの饒舌から、いわば苦悩を或る他のものに、いっそう悪しきものに、すなわち、焦躁と思い煩いという罪にまでいたらしめるものから解放されているのである。鳥が苦悩の時に沈黙しているというのは、一片の俳りにすぎなくて、鳥はどんなに他のものに対して沈黙しているようでも、その心の奥底では決して沈黙し

ているのではなく、鳥はその運命に悩み、神と人とに哀訴し、自分の心を思い煩いの中で汚すに委せているのだと、信じてはならない。そうではなくて、鳥は沈黙して悩んでいるのである。ああ、人間はそうしないのである。しかし人間の苦悩が鳥の苦悩とくらべて、非常に恐ろしく見えるのは、いったい何によるのであろうか。それは人間が語りうるということによるのではなかろうか。そうではない。語りうることによるのではない。(それはむしろ優越点である。)それは人間が沈黙しえないことによるのである。事情はつまり性急な者が、理解したと信ずるようなものではなく、また絶望した者が、「私は私のあらゆる苦悩を感ずるがままに叫び出すために、嵐のような声をもっておればよいのに」と叫ぶとき、(そのことがすでに語ることの濫用であるが、)理解したといっそう激しく信じているようなものではない。ああ、それは全く重荷を卸すための愚かな手段にもならないのである。かれが声高く叫べば叫ぶほど、いっそう強くかれは自己の苦悩を感じるであろう。そうではなくて、汝が鳥のように沈黙することができるなら、汝の苦悩はおそらく軽くなるであろう。

そして百合も鳥と事情を等しくしている。すなわち、百合は沈黙している。たとえ萎れるといって悩むときにも、百合は沈黙している。汚れを知らぬ幼児が自己を偽る術を全然持っていないように、百合も自己を偽ることができない。——(実際、自己を偽ることは要求されてもいない。そして百合が自己を偽りえないことは百合にとって幸いである。というのは自己を偽る技倆はまことに高価くつくからである。)——百合は色を変えて、自己の悩んでいることを洩さないわけにはゆかず、それに対してはいかんともしえない。しかし百合は沈黙している。百合は自己の悩んでいることを隠すため

には、まっすぐに立っていたいと思うでもあろう。しかるに百合にはそうする力もないし、自分自身を思いのままにすることもできない。そこで百合の頭はたれ下がっている。かたわらを通り過ぎる人は、(もし多大の同情を寄せて、百合に眼を止めるならば！)それがどういうわけであるかを理解する。(それは実際きわめて明瞭に語っているのである。)しかし百合は沈黙している。百合の場合はそうである。しかるに人間の苦悩が百合の苦悩にくらべて非常に恐ろしく見えるのは、いったい何によるのであろうか。百合が語りえないということによるのではあるまいか。もし百合が語りえたなら、しかもまた百合が(ああ、人間と同様に！)沈黙する技倆を学ばなかったなら、その時には百合の苦悩もまた恐ろしいものとなるのではあるまいか。しかるに百合は沈黙している。百合にとって苦悩は苦悩であって、それ以上でもそれ以下でもない。しかし苦悩が苦悩より以上のものでも以下のものでもないというそのときこそ、苦悩は最もよく単独化され、また単純化される。しかもそれによって最小限にまで軽減されるのである。苦悩は実際存在しているのであるから、より小さくなることはできない。しかし反対に苦悩はそれが在るがままに止まっていないなら、無際限に大きくなりうるのである。なぜなら苦悩がその在るがままの姿を少しも変えないなら、従って在るがままの決められたものにすぎないなら、その場合にはたとえそれが最大の苦悩であっても、最小限に食い止められた苦悩なのである。ところがその苦悩が、本来どれだけの大いさのものであるか決められないままであるなら、苦悩はしだいに大きくなってゆくのである。すなわち、無規定性は、苦悩を無際限に大きくしてゆく、そして苦悩のこの無規定性は、語りうるという人間の不確実な優越点からまさに発しているのである。それに反して苦悩の規定性(それが在るより以上でも以下でもないという規定性)は、これまた人間が沈黙しうることによってのみ、獲得されるのである。しかも沈黙することを汝は百合と鳥より学ぶことができるのである。

戸外の百合や鳥のもとには沈黙が存在している。この沈黙は何を表現しているのであろうか。神に対する畏敬、すなわち、統べ給うているのは神であり、思慮分別を有するのは神お一人であることを表現しているのである。そしてこの沈黙が神に対する畏敬であればこそ、またそれが(自然においてもそうでありうるのだが)祈りであればこそ、沈黙はかくも荘厳なのである。そしてこの沈黙がかくも荘厳であるゆえに、人は自然の中に神を感知するのである。もし万物が神に対する畏敬によって沈黙するなら、なんという驚くべきことであろう。さらに神の語り給わない時でさえ、万物が神に対する畏敬によって沈黙していることは、あたかも神が語り給うているかのように、人には感ぜられるのである。

しかるに汝が詩人の助けを全く借りることなしに、戸外の百合と鳥のもとで学びうることは、すなわち、ひとり福音の汝に教えうることは、それは次のことである。すなわち、真摯ということが存在すること、真摯ということが存在すべきであること、百合と鳥とは汝の教師であるべきであり、汝はきわめて真摯に、かれらに従って自らを正し、かれらについて学ぶべきであること、すなわち、かれらのごとく沈黙することを百合と鳥より学ぶべきであることである。

そして実はこのことがもはや真摯ということである。——もしそれが正しく理解されるならば。

（夢見る詩人が理解するようにではなく、あるいは自然をして夢見させる詩人の理解するようにではなく、）汝が戸外の百合と鳥のもとで感知すること、すなわち、汝が神の前にあるというそのことが、真摯ということである。しかるに汝らはそれを人々との談話応答の中でしばしば忘れ果てているのである。なぜなら、われわれがただ二人で語る時でさえ、いわんやもっと数を増して、われわれが十人で、あるいは百人でいっしょに語る時には、その時には、汝と私、従ってわれわれ二人が、あるいはわれわれ十人が、またわれわれ百人が、神の前に立っているということが、きわめて容易に忘れ去られるからである。しかるにわれわれの教師である百合は、深慮を有している。百合は決して汝に付和雷同しないで沈黙している。そしてその沈黙を通して、百合は汝が神の前にあること、そして汝が（神の前にあることを想起しながら）真摯にかつ真実に神の前で沈黙せねばならぬことを、汝に訓えているのである。

そして汝は百合や鳥がそうしているように、神の前で沈黙すべきである。汝は言うべきではない、「百合や鳥が沈黙しうるのは、実は語りえないからである」と。汝はそう言うべきではない。汝は総じて何ひとつ言うべきではない。汝は沈黙して真摯となる代わりに、愚かにもまた無意味にも沈黙を破って談話を始めるという失策をやり、（おそらく沈黙を談話の対象として、）そのために沈黙からは何ひとつ生まれないで、かえってその代わりに——沈黙を越えて——談話が生まれ、こうして沈黙における教導を空しくするような試みは、いささかもなすべきではないのである。汝は神の前において汝自身を百合や鳥よりも重要なものと考えるべきではない。——そのことは、実に汝が神の前にある

ということによって、真摯さと真実さが生まれるや否や、おのずから生ずることである。さらに汝がたとえ世界における最も驚嘆すべきことをなし遂げたと考えるような場合でも、汝は百合と鳥とを汝の教師として認めなければならない。そして神の前において汝は百合や鳥よりも自己を重要なものと考えるべきではない。そしてもし汝の計画を繰り拡げるならば、それを容れるのに全世界も狭く思われるような場合でも、汝は汝の教師である百合や鳥より、神の前において汝のあらゆる計画を単純に収縮させることを学び、その結果として汝の計画は点より小さな場所を占めるにすぎず、かつまた最も無価値な瑣事よりも騒ぎ立てないようにならねばならぬ——汝がそれについて沈黙することによって。そして汝のこの世における苦悩が、いまだかつて何人も経験しなかったような苦悩であるとしても、汝は百合と鳥とを汝の教師として認めなければならない。そして汝は大なる苦悶の中にあっても、百合や鳥がその小さな悩みの中で自己を評価しているよりも優って、自己を重要なものと評価してはならない。

もし福音が汝に百合と鳥とを教師として認めることを、真摯に考えさせるならば、汝は上述のことを学ぶのである。しかるに詩人はそうではないのである。あるいは戸外の百合や鳥のもとにある沈黙の中ですっかり沈黙するのではなくて、（まさしくかれには真摯さが欠けているので、）かえって詩人となる人間は、そうではないのである。もちろん、詩人の語ることは、一般の人間の語ることとは全く異なっていて、きわめて荘厳であるから、卑俗な語らいとくらべるなら、ほとんど沈黙とひとしい効果を有している。しかし沈黙はやはりそんなものではない。詩人は戸外の沈黙を決して沈黙に到達

するために求めているのではない。実は詩人は反対に発言に到達しようとしているのである。それもただ単に詩人が語るように語るために。戸外の沈黙の中で、詩人は自分ではむろん遂行しないであろうような偉大な行為についてそこで夢みる。（詩人はいうまでもなく英雄ではない。）そして次に詩人は雄弁になる。（それはおそらく詩人が行為の不幸なる恋慕者であるそのためであろう。幸福な恋慕者は英雄である。）詩人はこうして雄弁となる。そしてかれの雄弁は詩の中に注ぎ出される。戸外の沈黙の中でその時詩人は、全世界を幸福にするような偉大な計画を考案する。しかし偉大な計画とはいってみても、それは決して実現されない。――実現はしないで、それはつまり詩となるのである。戸外の沈黙の中でその時詩人は自己の苦痛について深く考え込む。その時詩人は、万物がかれのごとく悩んでいることを、万物を通して語らせるのである。（詩人を教えるはずであった鳥と百合さえ、そのために詩人に仕えなければならないのである。）そして詩人の苦痛のこの反響が詩である。なぜなら単なる叫びは詩ではないが、しかし叫びの自己自身への限りなき反響、それは詩である。

それゆえ、戸外の百合や鳥のもとにある沈黙の中で、詩人は沈黙しない。それではなぜ沈黙しないのであろうか。それはまさしく詩人が関係を逆転させるからである。すなわち、詩人は鳥や百合とくらべて、自己をいっそう重要なものとするからであり、詩人は百合や鳥の代弁をしてやっているので、かれらはかえって詩人に感謝せねばならないのだと自負しているからである。――ところでその時かれに課せられていたことは、かえって鳥や百合から沈黙を学ぶことであったのに。ああ、福音が百合と鳥との助けを借りて、私の親愛なる聴衆である汝に、真摯さを教えることができればよいのに。そ

して福音は、私が汝を神の前における沈黙に完全に連れてきたことを、私に教えてくれることができればよいのに。そうするならば、汝は沈黙の中で汝自身を全く忘れ去るであろうに。すなわち、汝の名声高き名をも、悪評多き名をも、また取るに足らぬ名をも忘れ果てて、口をつぐんで、「御名を崇めさせ給え」[1]と神に祈るであろうに。そうするならば、汝は沈黙の中で汝自身を忘れ去るであろうに。すなわち、汝の偉大にしてすべてを包括する計画をも、あるいはただ汝と汝の未来のための小さな計画をも忘れ去って、口をつぐんで、「御国を来らせ給え」と神に祈るであろうに。そうするならば、汝は沈黙の中に汝の意志を忘れ去るであろうに。すなわち、汝の我意を忘れ去り、口をつぐんで、「御心を成らせ給え」と神に祈るであろうに。実際、汝がもし百合と鳥より神の前で全く沈黙することを学びうるならば、その時福音が汝を助けえないような何事かがあるであろうか。その時には、実際汝にとって何事も不可能ではないはずである。しかしたとえ福音が鳥と百合との助けを借りて、汝に単に沈黙を教えたにすぎないとしても、何事かに関して福音はその時すでに汝を助けていなかったであろうか。なぜなら、すでに述べたように、神を畏れることが知恵の始まりであるとすれば、沈黙はまた神を畏れることの始まりである。蟻のもとに行って賢明となれと、ソロモンは言った[2]。福音は百合と鳥のもとに行って沈黙を学べと言うのである。

（1）〔訳注〕「主の祈り」の一節。「主の祈り」の全文は次の通りである。「父よ、御名を崇めさせ給え。御国を来らせ給え。御心の天に成るごとく地にも成らせ給え。われらの日用の糧を今日も与え給え。われらに負目ある者をわれら赦すごとく、われらの罪をも赦し給え。われらを試みにあわせず、悪より救い出し

給え。国と力と栄えとは永久に汝のものなればなり。」「主の祈り」はルカによる福音書一一の一―四に見られるように、イエスが弟子に乞われて教えられた祈りであるが、後に教会で上記のような形に定形化された。

(2) 〔訳注〕旧約聖書の箴言六の六―九に「なまけ者よ、蟻のところへ行き、そのすることを見て、知恵を得よ。蟻は、かしらなく、つかさなく、王もないが、夏のうちに食物をそなえ、刈入れの時に、かてを集める」とある。箴言は一の一に「ダビデの子、イスラエルの王ソロモンの箴言」とあるので、キルケゴールは「蟻のもとに行って賢明となれと、ソロモンは言った」と記したのである。

「先ず神の国とその義とを求めよ。」しかし先ず神の国を求めること、神の国を追い求めることは、まさに沈黙の中に、百合と鳥とに固有な沈黙の中に表現されている。百合と鳥とは神の国を求めるのみで、他の何物も求めはしない。しかるに残りのすべてのものは、おのずから百合と鳥とに加えられるのである。しかしもし百合と鳥とが全く他の何物をも求めていないなら、その時には決して百合と鳥とは、神の国を先ず求めているのではない。それではいったい福音が「先ず神の国を求めよ」と言い、しかもそう言うことによって、或る他のものは後に求めなければならないかのような感じを惹き起こすのはどうしたことであろうか。ことに福音の考えは明白に、人間の求むべき唯一のものは神の国であれというのであってみれば。それというのは、先ず第一に求められるときにのみ、神の国は真に求められるのであり、先ず第一に神の国を求めない者は、全然それを求めていないということによるのであろう。さらにそれはまた求めうるという能力が、それ自身の中に他のものを求めうる可能性

を含んでおり、そのためにむろん最初は外から人間に近づいてくるので、人間に他のものを求めることを許す福音は、人間に対して汝は先ず神の国を求めるべきであると言わねばならないことによるのである。そしてそのことは結局福音が穏やかにまたやさしく人間のもとに下りて来て、人間を善に誘うことによるのである。もし福音が単刀直入に汝はただひたすら神の国のみを求めるべきであると言おうとでもしようものなら、人間はおそらく過重な要求を受けたと信じて、半ばは気短かになり、半ばは不安になって、身を退いてしまうであろう。ところが福音はいくらか人間に調子を合わせているのである。その時人間は自己の追い求める多くの物を眼前にしながら立っている。――そこで福音は、先ず神の国を求めよと言いながら、人間にむかうのである。そこで人間は考える、「そうだ、もし後で他のものを求めることが許されるなら、私は神の国を求めることから始めよう」と。こうして実際にそのことが始まるなら――福音は何がそこから結果するかをよく知っている。すなわち、人間は神の国を求めることにすっかり満足し、満ち足らわされて、他のものを求めることは全く忘却してしまい、実際他のものを求めたりなどすっかりしなくなるのである。従ってこのようにしてただひたすら神の国のみを求めるということが、真実となるのである。そのように福音は振舞うのである。そして実は年寄りもまた子供に対してそのように語るのである。まあ、一人の非常に腹の空いた幼児のことを考えてごらんなさい。さて母親が食物を運んできて、幼児が自分のもらった食物を見てとるならば、おそらく気短かに泣いて言うであろう。「ちょっぴりの食物ではいやだ。そんなもの食べたってお腹が空くのは同じことだ」と。そしておそらく幼児は非常に気が短いので、全然食べようとはしな

いであろう。「ちょっぴりの食物なんか、ない方がましだ」と。ところがすべてが誤解であることを非常によく知っている母親は、幼児に約束する。「そうだよ、そうだよ、まあ、おまえ、ちょっとそこにあるものを食べてごらん。あとで私はもっとどっさり持って来てあげるから」と。こうして幼児は食べ始めるのであるが、次には何が起こるであろうか。半分も食べ終わらない中に、幼児は食べ飽きるのである。もし母親が即座に「それはほんとにたくさんすぎるほどだよ」と訓したとしたら、母親はおそらくは間違ってはいなかったであろうが、しかし教育に役立つように、幼児を取扱わなかったことになるであろう。福音は教育に通暁している。福音にとって最も重要なことは、誤りを指摘して、叱責することではない。むしろ福音にとって最も重要なことは、人間を福音の指示に従うようにすることである。それゆえ福音は言うのである、「先ず求めよ」と。こうして福音は人間の異論をことごとく封じ、人間を沈黙させ、そうして実際に神の国を求め始めるようにさせるのである。しかも次にはこの追求が、人間を満ち足らわせるので、人間はその時実際にただひたすら神の国のみを求めるのである。

先ず神の国を求めよ。（それは百合や鳥のごとくになれということを、すなわち、神の前で全く静かになれということを意味している。）そうすれば残りのすべてのものは、汝に加えられるであろう。

二　人は二人の主に兼ね事うること能わず、あるいはこれを憎み彼を愛し、あるいはこれに親しみ彼を軽しむべければなり

私の聴衆よ、汝はこの世の中で「あれか、これか」がしばしば問題となり、しかもこの「あれか、これか」は往々にして非常な注目をひき、極端に異なった仕方で、すなわち、あるいは希望に満たしつつ、あるいは恐怖に戦かせつつ、あるいは撓まざる活動に促しつつ、あるいは硬直せる停頓に陥れつつ、かの単独者たちの心を労させることを知っている。汝はさらに同じこの世の中で、人々はまた「あれか、これか」は全然存在しないと思っており、しかもこの知恵が最も重要な「あれか、これか」と同じほどの注目をまたもやひくことを知っている。しかし戸外のこの百合と鳥のもとなる沈黙の中では、「あれか、これか」が存在するということは、疑わしいのであろうか。あるいはここでは、それがいかなる「あれか、これか」であるかが、疑わしいのであろうか。あるいはここでは、この「あれか、これか」が最深の意味において唯一の「あれか、これか」であるかどうかが、疑わしいのであろうか。

否。それについてここでは、すなわち、神の知ろしめす空の下であるのみならず、神の前なるこの

荘厳なる沈黙の中では、なんの疑いもありはしない。「あれか、これか」は存在している。神か——それとも……。実際その時爾余のものはどうでもよいのである。その時人が何を選ぼうとも、もし神を選ばないならば、「あれか、これか」がかれに見落とされたか、それとも「あれか、これか」という際に、かれが失われたものとなったか、いずれかである。それゆえ、神かそれとも、である。爾余のものは、それが神に対立するものであることを除いては、全然重点は置かれず、従って重点は限りなく神に置かれ、こうして神こそ自ら選択の対象となることにより、決断をしてそれが真に一個の「あれか、これか」となる緊張を与えるものであることを、汝は知っているのである。もし人が軽率に、あるいは憂愁に沈みつつ、唯一者としての神の存在するところで、なお人は本来三つの事物の間で選択することが可能であると考えるなら、かれは失われたものとなるであろう。あるいはかれは神を失っていて、その結果、かれには本来「あれか、これか」が全く存在しなくなるのである。なぜなら、神とともに、すなわち、神の観念が消え去るか、あるいは混乱せしめられるとともに、「あれか、これか」もまた失われるからである。しかしどうしてそうしたことが、百合や鳥のもとなる沈黙の中で人に起こりえようか。

それゆえ、「あれか、これか」なのである。神を、そして福音の示すように、神を愛するかそれとも憎むかである。むろん、汝の周囲か喧騒を極めているか、あるいは汝が気散じに耽っているならば、それは汝にとってほとんど誇張のように考えられ、愛することと憎むこととの間には、あまりにも大きな距離が存在しているので、この二つのものは到底ひと思いの中に、ただ一つの思考の中に、あるいは挿入句もなく、橋渡しも媒介もなく、また最も小さな分離符もなく、直接連続する二つの言葉の中に入れられるほど近く引き寄せることはできないと思われるであろう。しかし物体が真空の中においては、実に無限の速度をもって落下するように、戸外の百合と鳥のもとなる沈黙、神の前の荘厳なる沈黙もまた、愛するかそれとも憎むかというこの二つの相対立せるものが、同一の瞬間に反発しつつ相触れるようにし、真に同一の瞬間に出現するようにするのである。また真空の中においては落下する物体を止めるべき第三の事物が存在しないように、神の前の荘厳なる沈黙の中では、相互に距ろうとしつつある愛することと憎むことを、止めておくことのできる第三のものは存在しないのである。

——神に、そして福音の示すように、神に親しむか、それとも神を軽しめるかである。人との交わりや商取引きや、多くの人々との交際においては、愛と憎しみの間には大きな距離があるように思われる。「私はこの人と交わる必要はない。しかしそれは私がこの人を軽んじているということにはならない。決してそのようなことにはならない」と人々は言う。そして多くの人々との交際においてもそうである。多くの人々と人は社交的に手広く、本質的な内面性なしに、多かれ少なかれ冷淡に交わっているのである。しかし交際する人の数が少なくなればなるほど、手広いという意味での社交的交際が少なくなればなるほど、すなわち、内面的になればなるほど、よりいっそう「あれか、これか」が交わりに対して決定的なものとなり始める。しかるに神との交わりは最も深い意味において非社交的であり、絶対的に非社交的である。ただ二人の愛しあっている人々を、すなわち、きわめて親密に交わっているので、当然非社交的でもある関係を考えてみよ。——そうすれば愛しあっている人々に

とっても、かれらの関係にとっても、互いに親しむか、互いに軽しめるかという関係があるのみである。さて、百合と鳥のもとなる神の前の沈黙の中では、従って神より外の何者も存在しないところでは、すなわち、汝にとって神との外には全然他の交わりの存在せぬところでは、神に親しむか、あるいは神を軽しめるかということのみが問題なのである。そこには他の者は全然存在せぬゆえに、そしてまたいかなる時にも神を軽しめることなくして与しうるような者は、だれ一人そこには存在せぬゆえに、言い遁れる術はないのである。なぜならこの静寂の中でこそ、神がいかに近く汝に在すかということが明らかであるからである。二人の愛人たちは互いにきわめて近くいるので、一人の者は他の者が生きている限り、かれを軽しめることなしに、或る他の者に親しむことは不可能である。そのことの中に二人の間における「あれか、これか」のなんたるかが示されている。なぜなら、この「あれか、これか」（親しむかそれとも軽しめるか）がそこに存在するかいなかは、二人の者が相互にどれだけ接近しているかということに繋っているからである。しかし言うまでもなく、死ぬこともない神は、二人の愛人たちが互いに接近しているよりもいっそう近く、無限に近く汝に対して存在しているのである。すなわち、汝の造り主にして支え主である神、その中にあって汝が生き動きかつ存在している神、その恵みによって汝がすべてのものを受ける神は。それゆえに神に与するかそれとも神を軽しめるか、いずれかであるというのは、決して誇張ではない。それはだれかが瑣事のために「あれか、これか」を持ち出す場合と同一ではない。そういう人は当然思慮が足りないといわるべきである。しかしここではそうではないのである。なぜなら、神はどこまでも神であって、決して「あれか、これ

か」をどうでもよい事に関係させて持ち出し給いはしないのであるから。神は薔薇かそれともチューリップかなどと言い給わない。そうではなくて、神は自己自身に関係させて、「あれか、これか」を持ち出して言い給うのである。私に……すなわち、汝は私に、それもすべてのことにおいて絶対的に与するか、それとも汝は——私を軽しめるかと。しかしおそらく神は自己自身について他のように語りえなかったであろう。いったい、神は自己自身について、かれが絶対的に第一の地位に立たないかのように語り給うことができるであろうか。神が唯一者ではなく、絶対的にすべてでなく、それゆえかえって単なる或る物にすぎず、従ってまた、いつか他のものとともに問題にされることを望んでいる者のように、自己自身について語り給うことができるであろうか。そうであったら、もちろん神は自己を失い、また自己自身についての考えを失ったに違いない。そしてかれは神ではないであろう。

それゆえ、百合と鳥とのもとにある沈黙の中には、「あれか、これか」が存在している。神かそれとも……、そしてその時神を愛するかそれとも——神を憎むか、神に与するかそれとも——神を軽しめるかということが存在しているのである。

いったい、この「あれか、これか」は何を意味し、神は何を求め給うているのであろうか。というのは、「あれか、これか」は一つの要求であるから。例えば、愛している者が相手に「あれか、これか」と問うときに、その人は愛を要求しているように。しかし神は汝に対して愛する者のようには関係せず、汝もまた神に対してそのように関係しないのである。それは異なった関係である。すなわち、造られたる者の創り主に対する関係である。神はいったいこの「あれか、これか」によって何を求め

給うているのであろうか。神は服従を、絶対服従を求め給うているのである。汝がもしすべてにおいて絶対的に従わないならば、汝は神を愛していないのである。そして汝が神を愛していないならば、それならば、――汝は神を憎んでいるのである。汝がすべてにおいて絶対的に従わないならば、汝は神に与していないのである。あるいは汝が絶対的にしかもすべてにおいて神に与しないなら、汝は結局神に与していないのである。そして汝が神に与していないならば、それならば――汝は神を軽んじているのである。

この絶対服従――神を愛さないならば神を憎むのであり、もし絶対的にしかもすべてにおいて神に与しないならば、神を軽しめるのであるという――この絶対服従を、汝はそのために福音が指定した教師たちから、すなわち、百合と鳥から学びうるのである。人は服従を学ぶことによって、支配を学ぶといわれている。すなわち、いっそう正確にいうならば、人は自ら服従するときに、服従を教えることができるのである。こうしたことが百合と鳥には生じているのである。われらは学ぶ者を強制するなんらの力をも有してはいない。かれらは強制するものとしてただ自己の服従をもつばかりである。百合と鳥とは「服従せる教師たち」である。それは奇妙な話ではあるまいか。服従は言うまでもなく他のところでは学ぶ者について使われる言葉である。学ぶ者には服従することが要求される。しかしここでは服従しているのは実に教師自身である。そしてかれは何を教えているのであろうか。服従である。では何によって教えているのであろうか。服従によってである。もし汝が百合や鳥のように服従することができるなら、その時には、汝はまた服従によって服従を教えることができるであろう。しかしおそらくは汝も私も人を教えるほどに服従してはいないであろうから、われわれは百合と鳥より学ぼうではないか。

服従

戸外の百合と鳥のもとには沈黙が存在するとわれわれは述べた。しかしこの沈黙、あるいはわれわれがそれを学ぼうとしたこと、すなわち、沈黙に達するということ、それは真に服従しうるための第一の条件である。もし汝の周囲のすべてのものを戸外に存するような荘厳な沈黙が蔽うているならば、そしてもし汝の中に沈黙が存在するならば、そのときには汝は感知するであろう、しかも極度の緊張をもって感知するであろう。汝が主なる汝の神を愛し、その神に仕えるべきであるというのは、真実であることを。こうして汝は知るであろう、そのように神を愛さねばならぬのは「汝」であり、全世界の中で汝ひとりであることを。――その汝は荘厳なる沈黙のただ中でただ独りでいるのであり、真にただ独りでいるので、あらゆる疑惑も、異論も、弁疏も、遁辞も、疑問も、要するに汝自身の心の中にあるあらゆる声、すなわち、汝の周囲でまた汝の中で、沈黙を通して汝に語りかける神の声以外のあらゆる他の声は、沈黙せしめられていることを。もしかかる沈黙が汝の周囲に、また汝の中にいまだかつて存在しないなら、汝は決して服従を今も昔も学んでいないのである。しかし汝がもし沈黙することを学ぶならば、汝はおそらく服従をも学ぶであろう。

それでは汝の周囲の自然を注意して見よ。自然においてはすべてが服従であり、絶対服従である。ここでは「天におけるがごとく地にてもまた神の意志が成っている。」[1] あるいは人が聖句を他の方法で引用してもなお、それは当てはまるのである。ここでは、つまり自然においては、「天に成るがごとく地にても神の意志は成っている。」自然においてはすべてが絶対服従である。ここでは（むろん、人間の世界においても同様であるが、）神がただ全能者であるためにすべてのものは、どんなにつまらぬものでも、神の意志なくしては起こらないというだけではない。そうではなくて、ここではすべてのものが絶対的に服従するので、神の意志がただちに成るのである。しかしこれは確かに無限の相違であろう。なぜなら、一方はどんなに小胆な人間の不従順も、どんなに大胆な人間の不従順も、また個個の人間の不従順も、全人類の不従順も、まことにかれの、すなわち全能者の意志に反してはいかにささいなことといえども為しえないというのであり、他方は、すべてのものが神に絶対的に服従して、天にも地にも神の意志より外にはいかなる意志も存在しないので、神の意志が成るというのであるから。そして自然においてはそのとおりである。自然においては聖句の語っている「御心なくば一羽の雀も地に落つることなし」[2] ということが妥当する。――しかもそれは単に神が全能者であるためではなくて、すべてのものが絶対的に服従しており、神の意志が唯一のものであるがためである。そこにはなんらの抗議もなく呟きもなく、また溜息も聞かれない。絶対服従の雀は、もしそれが神の意志であるならば、絶対に服従して地に落ちる。自然においてすべてのものが絶対服従である。風のざわめき、森の谺、小川のせせらぎ、夏の虫のぶーんという唸り、木の葉のさやぎ、草の囁き、ありとあら

ゆる声、汝の聞くありとあらゆる声は、そのすべてが服従であり、絶対服従である。こうして汝は天体の従順なる運行において神を知りうるように、そこにおいても神を知りうるのである。しかも酷暑の恐ろしさや、雲の軽やかな柔軟さ、そして大海の滴るような流動性とその凝聚力、それに音響の迅速さと光線のいっそう大なる迅速さ、それらのすべてが服従なのである。そして太陽が暁の鐘の音とともに昇り、夕の鐘の音とともに沈みゆくこと、そして風がたちまちにして変わること、また時を定めて盈ちては退きゆく潮の干満、そして正しく循る四季の循環、すべてのそのことは、すべてのことは、みんな服従なのである。実際、自己自身の意志を持ちたいと望むような天の星やあるいは地の塵があるならば、かれらはその瞬間、もろともに無とされるのである。しかもきわめて容易に。なぜなら、自然においてはすべてのものが無であり、従って神の絶対的な意志以外には何物も存在せず、神の絶対的な意志が存在しないその瞬間には、すべてのものは存在することを熄めると考えられているからである。

（1）〔訳注〕本書一九七ページ注（1）「主の祈り」の一節。

（2）〔訳注〕マタイによる福音書一〇の二九。

それでは服従を学ぶために、百合と鳥とをもっと詳細にしかも人間的に観察してみよう。百合と鳥とは神に絶対的に服従している。その点でかれらは師匠である。ああ、多くの人々が逸し去るか、達しえずにいる絶対者に立派に出あうということは、教師にとっていかにふさわしいことであるかを、かれらは理解している。ああ、それは多くの人々の最もよく通暁している中途半端ということに、百

合と鳥とが少しも通じていないためである。小さな不従順は絶対に不従順であるはずがないと、百合と鳥とは考えることもできないし、またそう考えようと思ってもいない。在るか無きかの小さな小さな不従順のごときは、とうてい神を軽んずることと同一であろうはずがないなどと、百合と鳥とは考えてもいないし、またそう考えようと思ってもいない。一方では神に仕えながら、しかも他方で同時に仕えうる或るものや或る人が存在するであろうと考えたり、またそのように神に仕えることが、同時に神を軽んずることではないなどと、鳥や百合は考えることもできないし、またそう考えようと思ってもいないのである。なんとまあ安心して絶対者に出あい、その中に生きていることであろう。ああ、汝ら深慮ある教師たちよ、いったい絶対者よりほかのどこに安心を見いだすことができるのであろうか。制約されたものが当然自己自身の中に不安を宿しているのであってみれば。それゆえ、私は言葉をかえて語ったほうが、おそらくいっそうよいであろう。私は百合や鳥が安心して絶対者に出あっていることに感嘆すべきではなくて、むしろ真に絶対者が存在していて、かれらに驚嘆すべき安心を与え、その安心がかれらをして服従の教師たらしめているのだというべきであろう。なぜなら、百合と鳥とは神に対して絶対的に服従しているのであるから。かれらの服従はきわめて単純であり、また崇高であるので、かれらは生起するすべてのものは神の絶対的意志によることを信じており、世界においては神の意志に絶対服従して行為するか、あるいは神の意志に絶対服従して順応するかより外に、全然道のないことを信じているからである。

百合の置かれている場所がこのうえもなく不幸な場所であって、百合は全生涯の間、在れども無き

がごとくであり、百合を見て喜んでくれる人はだれ一人気づかないであろうことが、あらかじめわかり切っていても、あるいはその環境が——実際、話題になっているのが百合であることを私は忘れているので——もっと絶望的に不幸であって、その場所は捜し求められないばかりでなく、かえって避けて通られるとしても、従順な百合は自己の運命に服従して、美しさの限りを尽くして花咲くのである。人はその百合のような場所に置かれでもしようものなら、おそらく言うであろう。「人がもし百合であり、しかもその百合のように美しいなら、そのような場所におかれて、美しいという印象の無効になることのわかり切っているような、非常に思わしくない環境で花咲くことは、苦しいことであり、耐えがたいことである。いや、それどころではない。創造者がほんとうに自己矛盾に陥っているのであるから、それは耐えがたいことである」と。われわれ人間はもし百合の場所に置かれるならば、おそらくそう考え、また語り、すぐさま怨恨のために凋むであろう。しかし百合はそのように考えないで、おそらく次のように考えるであろう。「むろん、私は自分で場所や境遇を定めることはできなかった。従ってそのことは全然私の関与せぬことである。私が今在るところに立っていることは神の意志である」と。そう百合は考える。そしてそれがまた実際百合の考えるとおりであり、神の意志であることを、人々は百合によって感知することができるのである。なぜなら百合は美しいから——ソロモンの栄華の極みにおいてさえかく粧わなかったのであるから。ああ、もし百合と百合との間に美しさの相違があるならば、讃辞はこの百合に与えられねばならないであろう。この百合は他に優る美しさを有している。なぜなら、美しくあることは、もし人が百合であるなら、それは元来なん

の技倆でもない。しかし百合が一定の条件の下で、美しくあることをなんとかして妨げようとする環境の下で、美しくあること、また百合がかかる環境の下にありながら完全に自己自身であり、自己自身を保ちえていること、また百合があらゆる環境の力を無視していること、いや、そうではない。百合はそうしているのではない。が、しかし百合がそこでなんの思い煩いもなしに美しさを極めていること、それは百合の技倆でなくてなんであろう。なぜなら、百合がそうした環境にもかかわらず、百合自身でありうるのは、百合が神に絶対に服従しているからである。そして百合は神に絶対に服従しているので、また全然思い煩わないのである。そして特にこのような環境にありながら、思い煩わないで済むのは、絶対に服従するもののみに可能な事柄である。そして百合は——それは互いに相応じているのであるが——全く百合自身であり、全然思い煩わないからこそ美しいのである。ただ絶対服従を通してのみ人は少しの狂いもなく、自己の立つべき「その」地点に出あいうるのである。そしてもし人がその地点に絶対的に出あうならば、それはたとえ肥溜であっても、そんなことはどうでもよいことを理解するのである。——たとえ百合の出あった場所がこのうえもなく不幸な場所であって、ちょうど蕾の開くその瞬間に、不運にもそのことをほぼ確実に予感しながら、しかもそのまま折り取られるというようなことが起ころうとも、従って百合の発育は没落であり、実際、百合の発育して美しくなるのは、一見したところ単に没落するためにすぎなかったとしても、従順な百合は従順にそこに止まり、それが神の意志であることを知っている。そして百合は蕾を開くのである。——もし汝がこの瞬間百合を見るならば、この成育が同時に没落であったとは、百合を見て夢にも知ることはできなかったであろう。百合はそれほど完全に成長し、また豊かに美しく咲きいでて、そしてそれほど豊かにまた美しく——というのはその全体は全く一瞬間にすぎなかったのであるから——絶対に服従して自己の没落を迎えたのである。或る人間は、あるいはわれわれ人間は、百合の立場に置かれるなら、発育と没落が一つであることを思って、おそらく絶望するであろう。そしてそのまま絶望のために、たとえ一瞬にせよわれわれの成りえたであろうものに成ることを自ら止めるであろう。しかるに百合においては事情が異なっている。百合は絶対的に服従している。そのために百合は美しくも百合自身となったのである。百合は実際にそのあらゆる可能性を展開したのである。その同じ瞬間に自己の死が訪れるという考えに妨げられないで、全然妨げられないで。ああ、もし百合と百合との間に美しさの相違があるなら、この百合に讃辞は与えられねばならないであろう。この百合は他に優る美しさを有していたのであるから。すなわち、その同じ瞬間に没落するであろうと確信していたにもかかわらず、そのように美しかったのであるから。そして真に没落を目睹しつつ、自己の美しさを残る隈なく展開する勇気と信仰をもつことは、ただ絶対服従のみのよくなしうるところである。上述のように没落の確信が人間を混迷させるなら、その結果人間は自己の可能性を展開しないであろう。それはたとえ人間に許されている生存が、ただ束の間にすぎないにしても、なお可能であったのであるが。「なんのために」と人間は言うであろう。あるいは「なにゆえに」と言うであろう。あるいはまた「それがなんの役に立とう」と言うであろう。そして人間はその可能性を少しも展開しないで、むしろいじけて醜くなり、一足先に没落するという罪を犯すのである。ただ絶対服従のみが次の瞬間に全然迷

わされないで、その瞬間を利用しうるにすぎないのである。

旅をすべき瞬間が鳥に訪れるとき、鳥は心の中でこのままの幸福をなお保ちうることを確信し、旅をすることによって確実なるものを放棄して、不確実なるものを攫むことになると確信していても、それでも従順な鳥は即座に旅を始めるのである。単純にそして絶対服従に助けられて、鳥はただ一つのことを理解しているにすぎないが、しかし鳥は今「その瞬間」が訪れたことを絶対的に理解しているのである。鳥がこの世の冷酷さに打たれる時、鳥が不遇と不幸の中で試される時、鳥が幾日も幾日も来る朝ごとに、自分の巣のこわされているのを見いだすような時、そのような時でも、従順な鳥は日ごとに最初の時と同じような喜びと骨折りをもって、仕事を初めからやり直すのである。鳥は単純に絶対服従に助けられて、一つのことを理解しているのであるが、自己の責務をのみ尽くすことが自己の仕事であるということを、絶対的に理解しているのである。——鳥がこの世の悪意を経験しなければならぬとき、すなわち、神の栄光をうたっている小さな小鳥が、かれの鳴き真似をして、できることならその荘厳さを妨げてやろうと楽しんでいる一人の悪童のいることを見いださねばならぬとき、あるいは孤独な鳥が自分の好きな環境を、その鳥の好んでとまる、おそらくかれにとって貴重な思い出のこめられている枝を、持っているのに、——しかもそこに一人の人間がいて、石を投げたり、他のことを行なったりして、この場所から鳥を逐い払うことを楽しみにしているとき、ああ、鳥は逐われようとも、嚇されようとも、倦むことなくかれの愛するものを、そしてかれの古き場所を、繰り返し求めるように、それと等しく悪にいることに倦むところを知らぬ人間のいるときにも、従順な鳥

はすべてのことにおいて絶対的に自己を見いだすのである。単純に絶対服従に助けられて、鳥はただ一つのことを理解するにすぎないが、しかし鳥は自己の遭遇するすべてのことは、本来的にはかれに関係がなく、従って非本来的にのみ関係のあることを、あるいはいっそう正確にいうならば、かれに本来関係のあること、しかもまた絶対的に関係のあることは、ただそれらのことにおいて神に絶対に従うことにすぎないことを、鳥は絶対的に理解しているのである。

われわれの学ぶべき百合と鳥とはこのようである。それゆえ汝は言ってはならない。「百合と鳥とは容易に服従しうるであろう。——かれらは実際服従以外の他の何事をもなしえないし、またこれを他の仕方ではなしえないのである。このような仕方で服従の模範となることは、実際必然性から徳を作り出すことを意味している」と。そう汝は言うべきではない。汝は総じて何も言うべきではない。汝はただ黙って従うべきである。かくてたとえ百合と鳥とが必然性から徳を作り出しているというのがその通りであったとしても、汝もまた必然性から徳を作り出すことに成功すべきである。汝もまた当然必然性に屈服している。神の意志はもちろんいかにするとも成るのである。それゆえ汝は絶対的に神の意志に服従して行為することにより、必然性から徳を作り出すように努力せよ。神の意志はもちろんいかようにするとも成るのであるから、汝は絶対的に神の意志に従うことによって、必然性から徳を作り出すことを試みよ。——絶対的に服従することによって、汝が神の意志を実現し、承認して、私は服従以外の他の何事をもなしえないし、またそれを他の仕方でなしえないと言いうるほどに。

それを目ざして汝は努力すべきではあるまいか。そして百合と鳥の事情が今やいかにあろうとも、

たとえ絶対に服従することが人間にとってもっと困難に思われようとも、人間には、言いうべくんば、その服従を緩めるに違いないところの危険、すなわち、神の忍耐を無にする危険のあることを熟慮すべきではあるまいか。いったい、汝はかつて真に真摯に、汝自身の生活を、あるいは人間の生活を、つまりすべてのものが絶対的に服従している自然とは非常に異なっている人間の世界を、観察したことがあるのであろうか。汝はかつてこの観察を行ない、しかもなお神が自らを「忍耐の神」ととなえられているのは、いかなる真理によってであるかを、なんの戦慄もいだかずに感知したことがあったであろうか。すなわち、神は「あれか、これか」を言うその神であること、われを愛せよ、しからざればわれを憎め、われに与せよ、しからざればわれを軽んぜよと言うその神であることを。——しかもその神が汝を、そして私を、そしてまたわれわれすべてを、耐え忍ぶ忍耐を有してい給うのだということを。もし万一、神が人間であったなら、そのときはどうであろうか。そのときには、もし私自身を例にとるなら、神はもうとっくの、とっくの昔に、私に倦み疲れ、私に関わることに嫌気がさしているに違いなかろう。そして次にきっと神は言うであろう。(もっともそれを人の親が言う時とは、全く理由を異にしてはいるが)「その子供は醜い上にひ弱く、馬鹿である上に物覚えが悪い、そしてたとえほんの少しばかりかれによいところがあっても、とうてい人の耐えることのできない非常に多くの悪いところが、かれの中には潜んでいる」と。そうだ。いかなる人もそれに堪えることはできない。ただ忍耐の神のみが、それに耐えうるにすぎないのである。

さあ、それでは汝は生きている無数の人間のことを考えてみよ。われわれ人間は幼児の教師となることは、忍耐のいる仕事であるという。それではこの無数の人間に対して教師であらねばならぬ神は、いかなる忍耐を必要とし給うことであろう。しかもその時必要な忍耐の量を無限に大きくするのは、次のことである。すなわち、神が教師であるところでは、子供たちはみんな多かれ少なかれ、大きな成人した人間であるという自惚に捉えられていることである。百合や鳥は全くその自惚から解放されている。しかもそのためにこそ、百合や鳥には絶対服従がきわめて容易に思われるという結果が生じるのであろう。「まさか」と人間の教師は言うであろう。「まさか子供が一人前の大人だと自惚れることはあるまいが、そうだったら人は必ず忍耐を失い絶望するであろう。なぜなら、そういうことにはどんな人だって耐ええないであろうから」と。そうだ。どのような人でもそれに耐えることはできない。ただ忍耐の神のみが、それに耐えうるにすぎないのである。視よ、それゆえに神は自らを忍耐の神ととなえ給うのである。しかも神は自分の言われていることの意味を十分に知り給うている。神は単なる気まぐれからそのように自称することを思いつき給うたのではない。そうではない。神は気分によって変わり給わない。それは実に耐え難いことである。神はそれを永遠の昔から知っていい給う。しかも神はそれを幾千年にわたる日々の経験から知り給うている。すなわち、神は永遠の昔から知り給うているのである。時間性が成り立ち、その中に人間の歴史が成り立つ限り、その限り神は忍耐の神であらねばならず、もしそうでないなら人間の不従順は、とうてい耐ええられないことを。百合と鳥とに対しては、神は父なる創造主であり、支え主である。ただ人間に対してのみ神は忍耐の神である。おそらくそのことは一つの慰めであり、最も必要な、しかも筆紙に尽くし難い慰めであろう。そ

れゆえ聖書もまた、神は忍耐の神であり、かつ「慰め」の神であると語っているのである。(1) しかしもちろんそれと同時に、人間の不従順が神を余儀なく忍耐の神たらしめているのだということは、恐ろしいほど真摯な事柄である。従って人間が神の忍耐を虚しくしないことは、恐ろしいほど真摯な事柄である。人間はいつも絶対的に服従している百合や鳥の知らない特性を、神のもとで発見したのである。換言するならば、神は愛に富み給うゆえに、自らが忍耐の神であるというこの特性を啓示し給うたのである。しかし、このように或る意味では（ああ、なんという恐るべき責任であろう）――人間の不従順に神の忍耐が対応しているのである。それは慰めであるが、しかし恐るべき責任を有する慰めである。人間はすべての人がかれを見捨てるときにさえ、いや、かれ自身がまさに自暴自棄に陥らんとするときにさえ、神はなお忍耐の神であることを知ることが許されるであろう。これは量り難い富である。ああ、しかしそれを正しく使用せよ。そうでないなら、それは汝をいっそう大きな不幸の中に衝き落とし、それは反対のものに変わって、慰めからは汝に対する最も恐ろしい難詰が生ずるであろう。なぜなら、人が絶対的に、しかもすべてのものにおいて神に与しないなら、「ただちに」神を軽んずることになるというのは、汝にとってあまりに残酷な話のように思われるであろうが、（それは決して実際以上に残酷ではないのであるが）しかし人が神の忍耐を虚しくするなら、神を軽んずることになるというのは、おそらくあまりに残酷な話ではないであろうから。

（1）〔訳注〕ローマ人への手紙一五の五―六に「どうか、忍耐と慰めとの神が、あなたがたに、キリスト・イエスにならって互に同じ思いをいだかせ、こうして、心を一つにし、声を合わせて、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神をあがめさせて下さるように」とある。

それゆえ、福音の指示に従って、百合と鳥より服従を学ぶように十分注意せよ。脅えるな。汝は自己の生活をこの教師たちの生活と比較して絶望するな。そこには汝が絶望すべき何物も存在していない。なぜなら、汝はかれらに学ぶべきであるから。そして福音は神が忍耐の神であることを汝に告げることによって、初めに汝を慰めるが、しかし次には汝が百合と鳥より学ばねばならないことを付け加えるのである。すなわち、百合や鳥のように絶対的に服従することを学ぶべきであり、二人の主に兼ね仕えぬことを学ぶべきであると付け加えるのである。――なぜなら、だれも二人の主に兼ね仕えることはできず、あれか、これか、に仕えるよりほかはないのであるから。

しかし汝が百合や鳥のように絶対服従にいたりうるならば、汝は自己の学ぶべきものを学んだのである。汝はそれを百合と鳥より学んだのである。しかし汝がもしそれを残る隈なく学んだなら、汝はかれらよりもさらに優って完全なものと成るので、百合と鳥とは教師であることを止めて、写象となるであろう。汝はただ一人の主に仕えること、かれのみを愛すること、すべてのことにおいて絶対的にかれに与することを学んだのである。かくて汝が神に対して「御意の天におけるがごとく、地にも成らせ給え」と祈るとき、その祈りは――なるほどそれはいかにしても実現されはするが、――それは汝を通して実現されるであろう。なぜなら、絶対服従によって実に汝の意志は神の意志と一つになり、かくして神の意志は汝を通して、天におけるがごとく地にも成るのであるから。かくてまた汝が「誘惑に遭わせ給うことなかれ」と祈るとき、汝の祈りは聴かれるであろう。なぜなら、汝が神に絶

対的に服従しているなら、汝の中には曖昧なものは何も存在しておらず、そして汝の中に曖昧なものが存在しないなら、汝は神の前に全く単純であるからである。しかるにいかなるサタンの狡智も誘惑の罠も、襲うこともできず、また捉えることもできぬ一つのものが存在している。それは、単純さである。サタンが自己の獲物として眼を光らせて窺っているもの――しかもそれは百合や鳥のもとにはいまだかつて存在しなかったのであるが、――またあらゆる誘惑が自己の獲物と確信して付け狙っているもの――しかもそれは百合や鳥のもとにはいまだかつて存在しなかったのであるが――それは曖昧さである。曖昧さのあるところには誘惑があり、そして誘惑よりももっと強力な者の現われることなど、易易たることである。しかし曖昧さのあるところには、なんらかの意味で根本に不従順もまた潜んでいるのである。しかるに百合や鳥のもとでは、全然曖昧なものは存在しないのである。そして百合や鳥のもとには、なんら曖昧なものが存在しないというそのためにこそ、百合や鳥を誘惑に陥れることは不可能なのである。全然曖昧なものの存在しないところでは、サタンは無力であり、全然曖昧なものの存在しないところでは、誘惑は無力である。――ちょうど罠をもった小鳥捕りが、鳥を見いだすことができぬときのように無力である。しかし、どんなにどんなに少しばかりの曖昧さが存在しても、サタンは強くなり、誘惑は圧倒的となる。そして悪であるかれは眼光が鋭く、その罠は誘惑といわれ、その餌物は人間の魂といわれる。元来誘惑はサタンから来るのではない。しかしいかなる、いかなる曖昧さもサタンから身を隠すことはできない。そしてサタンがそれを発見するやいなや、誘惑はかれのもとに生じるのである。しかし絶対服従によって神の中に身を隠している人間は、絶対に

安全である。かれは安全なる隠れ場から悪魔を見ることができるのであるが、悪魔はかれを見いだすことができないのである。かれの安全なる隠れ場からというのは、悪魔は曖昧さに対してはきわめて烱眼であるが、同時に単純さに対しては全く盲目となるからである。すなわち、悪魔は眼が見えなくなるか、あるいは失明してしまうのである。しかし絶対服従は悪魔を、すなわち大地も海も、またいかに深い心の奥底をも貫き通しうるようにみえる、そしてまた実際貫き通すことのできる烱々たる眼差を、戦慄することなくして見ることはできないのである。――しかもこのような眼を有している悪魔が、その悪魔が眼が見えないのである！　しかるに誘惑の罠を紡ぎ出す悪魔が、もし絶対服従によって神の中に身を隠している者に対して盲目同然であるなら、その人にはむろん誘惑というようなものは、全然存在しないのである。なぜなら、「神は何人をも誘惑し給わない」からである。こうして「われらを誘惑に遭わせ給うこと勿れ」というかの祈りが、すなわち、「不従順のために私を隠れ家から決して逐い出し給わないように。そして私が不従順の罪を犯す場合にも、汝はすぐさま私を隠れ家から外へ逐い払い給わないように。私は外ではたちまち誘惑の虜となるでありましょうから」という祈りが、聴き届けられるのである。そして人が絶対服従によってその隠れ家に止まっているならば、人はまた「悪より救い出されて」いるのである。

「人は二人の主に兼ね事うること能わず、あるいはこれを憎み彼を愛し、あるいはこれに親しみ彼を軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事うること能わず。」神とこの世に、善と悪とに兼ね仕えることはできない。こうして二つの力、神とこの世、善と悪とが存在しているのである。そして人間

がただ一人の主にしか仕ええないという理由は、おそらく二つの力が、たとえ一方が無際限に強い力であるとしても、互いに生死を賭けた闘争の中にあるためであろう。こうして人間であるという理由によって直面しているこの巨大な危険、（百合や鳥は幸福なる無邪気さを意味するかれらの絶対服従によって、その危険のかたわらを通り過ぎているのである。なぜなら、かれらのまわりでは、神とこの世との、そしてまた善と悪との争いは存在しないのであるから）――「人間」がこの二つの巨大な力のただ中に置かれていて、しかもその選択は自己に委ねられているというこの巨大な危険、この巨大な危険は、人は愛するかそれとも憎むかしなければならず、愛さぬことは憎むことを意味することになるという危険なのである。なぜなら、この二つの力は烈しい敵対関係にあるので、一方にただ少し傾いても、他の側からは絶対的な離反と見られるからである。もし人間が自己の直面しているこの巨大な危険を忘れ去るならば、（そして十分留意すべきことであるが、次のような性質の一つの危険、すなわち、この恐るべき危険を忘れ去ろうと試みるのは、真にそれを脱するための正しい方法ではないという危険が存在している。）もし人間がこの巨大な危険に直面していることを忘れ去るならば、すなわち、かれが危険の中にはいないと考え、「存在するのは安全であって危険ではない」と言うならば、そのときには福音の語るところは、かれにとって馬鹿馬鹿しい誇張と思われるに違いない。ああ、しかしそうした考えの起こるのは、かれがそのとき危険の中に呑み込まれ、自己を失っていて、そのために神がかれに注ぎ給うている愛について理解をもたず、神が愛すればこそ、理解服従を要求し給うのだということを考えず、また悪の力とその狡智と、そしてかれ自身の弱さについて理解をも

たぬためである。そして人間は生来、あまりにも愚昧であるので、福音を理解することもできないし、また理解しようとも欲しないのである。「あれか、これか」の決断について福音の語るところは、かれにとって真実ならぬ誇張と思われる。なぜなら、危険がきわめて大きいので絶対服従が必要であること、また絶対服従の要求が愛に基づいてなされうるということ、――そのことを人間は考えることができないからである。

それでは福音はどうするのであろうか。教育の知恵をもつ福音は、自己を人間との思想の争いや言葉の争いに投じて、その事情を証しようとはしない。もちろんいうまでもなく、人間がまず既述のような事情にあることを自ら悟り、そしてすぐさま絶対服従を決心するというようになるのではなく、むしろその反対である。先ず人間が絶対に服従することによって、初めて事情は福音の述べるとおりであることを悟るようになるのである。そのことを福音は知っている。それゆえ、福音はその権威を利用して言うのである。汝為すべしと。しかし同時に福音は寛大になるので、どんなに心の頑な者でも動かさないではおかないのである。福音は慈愛に満ちた父親が、その子に対するように、いわば汝の手を取って言うのである。「おいで、さあ、百合や鳥のところに行ってみよう」と。そして福音は戸外でさらに言葉を続けるのである。「百合と鳥を見てごらん。一生懸命見てごらん。その中に没入してごらん。この眺めはおまえの心を動かさないだろうか」と。こうして戸外の百合や鳥のもとなる荘厳な沈黙が、汝を深く動かすならば、福音はさらに解き明しながら言うのである。「しかしなぜこの沈黙はそのように荘厳なのであろうか。それは沈黙が絶対服従を表わしているからであり、すべての

ものは絶対服従をもって、ただ一人の主に仕え、しかも仕えながらただ一人の主に帰属し、完全なる統一と、偉大なる礼拝の中で主に結合されているからなのだ。さあ、それではおまえもこの偉大なる想念に感動するがよい。なぜなら、すべてがただ一つの想念であるから。そして百合と鳥とに学ぶがよい」と。しかし忘れるな、汝は百合と鳥とについて学ぶべきであり、百合や鳥のように絶対に服従すべきであることを。そして熟慮せよ、一人の主に仕えようと欲しなかったこと、あるいは他の主に仕えようと欲したこと、あるいは二人の、否、さらに多くの主に兼ね仕えようと欲したこと、それは人間の罪であったことを。また初めにはすべてのものがきわめて正常であったこの全世界の美を破壊し、統一のあった世界に分裂を持ち込んだのは、人間の罪であったことを。そして熟慮せよ、あらゆる罪は不従順に基づき、あらゆる不従順は罪であることを。

三　「空の鳥を見よ。播かず、刈らず、倉に収めず。」——明日のことを思い煩うな。……「今日ある野の草を観よ。」

それを行ないて、歓びを学べ

それではこの喜べる教師、百合と鳥とを観察しよう。「この喜べる教師を」というのは、汝の知っているように、歓びは伝わるものであり、従って歓びを教えるのに最も良き教師は、自ら喜べる者であるからである。歓びの教師は自ら喜ぶことや、あるいは自らが歓びであるということより外の何事をも問題としない。どんなにかれが歓びを伝えようと努めても——もし自分自身で喜んでいないなら、その教示は完全ではない。それゆえ歓びを教えることより容易なことは何事も存在しない。——ああ、人はただ自分自身でいつも真に喜んでさえいればよいのである。しかしこの「ああ」という嘆声は、ああ、それが必ずしもしかし容易でないことを——すなわち、いつも自分自身で喜んでおられることが容易でないことを意味している。なぜなら、人がもし喜んでいるなら、歓びを教えることはきわめて容易であり、それ以上確かなものは何もないのであるから。

しかし戸外の百合と鳥のもとには、あるいは百合と鳥とが歓びを教えている戸外には、そこには常

に歓びがある。そして百合と鳥とは人間の教師が往々にして陥るような困却には、決して陥らない。人間の教師はかれの教えようと思っていることを、書物にしるされたものとして、あるいはその蔵書の中に収められているものとしてもっていて、結局自己のもとにもっているのではなく、他の場所にもっているのである。しかるに百合と鳥とが歓びを教えているそのところには、いつも歓びが存在している。——歓びはむろん百合と鳥との中に宿っているのである。夜が白み、鳥が朝早くその日の歓びに目ざめるときに、なんという歓びがあることであろう。またたとえ感じは違っているとしても、日が傾き、鳥が嬉々としてその塒に急ぐときに、なんという歓びがあることであろう。そして永い夏の日にはなんという歓びがあることであろう。鳥が、(単に喜べる働き人のように、働きながらうたうのみではなくて、その主要な仕事が歌うことである鳥が、)喜んでその歌をうたい始めるとき、なんという歓びがあることであろう。そして隣りの鳥もまた歌い出し、次には向こう隣りに棲んでいる鳥が歌い始め、やがて合唱が起こるとき、なんという新しい歓びがあることであろう。なんという歓びがあることであろう。そして最後には海原のような歌声となり、森や谷や天や地に響き渡り、ついにその海原のような歌声の中で声をあげている鳥が、いまやあまりの嬉しさに翔けまわるにいたるとき、なんという歓びがあることであろう。こうして鳥の全生活を通して、到るところで到る時に、鳥は自己の娯しみの対象を何か(あるいはもっと正確に言うならば、十分に)見つけているのである。鳥はどんな瞬間でも空費はしない。鳥は娯しまなかった瞬間は、みな無駄使いされたものと考えるであろう。——露が降りて、百合に生気を与え、涼しくなって憩につくとき、なんという歓びがあるこ

とであろう。百合が浴したあとで、最初の日射しに快く身を乾すとき、なんという歓びがあることであろう。そして永い夏の日の歓びはどうであろう。ああ、ぜひかれらを眺めてみよ。百合を眺め、鳥を眺めてみよ。そして次にかれらをいっしょに眺めてみよ。鳥が百合のもとに身を隠して、そこに巣を作り、娯しみに戯れたり、冗談を言ったりして、得も言われぬほど気安気に、そこに巣を作っているとき、なんという歓びのあることであろう。鳥が高い木の枝から、あるいはもっと上の大空の雲から、幸福そうに巣を、そしてまた百合を見入り、百合も微笑みながら鳥の方に眼をあげるとき、なんという歓びに溢れていることであろう。あるいは百合や鳥をそんなに喜ばせているものは、量見の小さな理解の仕方では、取るに足らぬものであるから、その歓びはさらに小さなものであろうか。そうではない。これこそ、この量見の小さな理解こそ、誤解であり、しかも、ああ、最も痛ましく悲しい誤解である。なぜなら、百合や鳥をそんなに喜ばせているものが、取るにも足らぬものであることこそ、かれら自身が歓びであり、歓びそのものであることを証しているからである。しかしそれはあるいはこうでもあろうか。もし人の喜んでいるものが、全然無意味なものであるのに、それでも真実得も言われぬほどに喜んでいるとするならば、それは最もよくその人自身が歓びであり、歓びそのものであることを証しているのではあるまいか。ちょうど喜べる歓びの教師、百合や鳥が、絶対的に喜んでいるというそのために、歓びそのものであるように。すなわち、その歓びが或る条件に制約されている者は、歓びそのものではない。かれの歓びは、実際その条件に制約されており、従って条件付きの歓びにすぎない。しかるに歓びそのものであるものは、絶対的に喜んでいるのである。逆にいうな

らば、絶対的に喜んでいる者が、歓びそのものであるように。ああ、われわれがそれによって十分喜ぶことのできるに違いないような諸条件も、われわれ人間には多くの辛苦と憂慮とを作り出すのである。すべての条件が叶っているような場合でさえ、われわれはおそらく絶対的には喜ばないであろう。しかし、汝ら深慮ある歓びの教師たちよ、それ以外にありようはないのではあるまいか。なぜなら、いかに援助されようとも、（あらゆる条件を賦与されようとも、）人は条件付きという方法以外では、喜ぶことはできないのであるから。条件と拘束とは相互に対応している。そうだ。ただ歓びそのものである者のみが、絶対的に喜びうるのであり、また絶対的に喜ぶことによってのみ、歓びそのものとなりうるのである。

いったい、百合と鳥とのこの教示の内容は、なぜ歓びであるのかを、あるいは歓びについてのかれらの教示の内容はなんであるのかを、ごく簡潔に述べることはできないものであろうか。すなわち、百合と鳥とのこの教示の思想内容を、ごく簡潔に述べることはできないものであろうか。いや、それは簡単になされうることである。なぜなら、いかに百合や鳥が単純であっても、そのために決して無思想ではないからである。従ってそれは簡単になされうるのである。そして百合や鳥自身が、かれらの教える当のものであり、かれらが教師として教えるものを自ら表現しているということは、すでにその点で類いまれな簡約であることを、われわれは忘れないようにしよう。百合や鳥の教えるものは、（百合と鳥とが最も厳密な意味において、その教えるものを最初からもっているという意味での直接的でしかも初めての根源性とは異なって、）獲得された根源性である。そしてこの根源性、すなわち、

百合や鳥における獲得された根源性は、実にまた単純性である。なぜなら教示が単純であるか否かは、簡単な日常的表現が使用されるか、それとも誇張的な学識ぶった表現が使用されるかということには、あまり関係はない。そうではなくて、単純というのは、教師自身がその教える当のものであることである。そして百合と鳥とはそのとおりである。しかもかれらが歓びを教えるのは、身をもって行なうのである。ごく約めていえば、次のとおりである。存在しているのは、（しかり、この存在するという字に無限の重さが加わるのであるが、）今日である。存在するのは今日であって、他のいかなる日でもない。そしてまた明日に対する、あるいは明後日に対するなんの思い煩いも存在しないのである。それは百合や鳥の無思慮を示すものではなくて、沈黙と服従のもたらす歓びを示しているのである。なぜなら、もし汝が自然におけるような荘厳な沈黙の中で黙すなら、そのときには「明日」という日は全然存在しないであろうから。そして汝が宇宙万物の行なっているように服従するならば、明日という日は存在しないであろう。そのような不幸な日は、ただ饒舌と不従順とが見いだすにすぎないのであるから。しかしもし沈黙と服従によって明日という日がそこに存在しないなら、そのときには沈黙と服従の中に今日という日が存在する（実際、存在する）のである。――そしてそこには百合や鳥のもとにあるように、歓びがあるのである。

歓びとはなんであろうか。あるいは人はいつ喜ぶのであろうか。それは人が真に自己自身に対して現在的である時である。しかるに自己に対して真に現在的であるということは、この「今日」ということであり、今日存在する、真に今日存在するということである。そして汝が今日存在するというこ

とが、真実であればあるほど、従って汝が汝自身に対して、今日完全に現在的であればあるほど、それだけ明日という不幸な日は、汝にとってそこに存在しないのである。歓びとは現在的な時のことであり、すべての重みの懸けられた意味での現在的な時のことである。それゆえ神は至福である。永遠に今日と告げるその神は。今日在すことによって、永遠限りなく自己自身に現在的であるその神は。従って百合や鳥はそのように喜んでいるのである。かれらは沈黙と絶対服従を通して、今日存在するがゆえに、自己自身に完全に現在的なのであるから。

「しかし」と汝は言うであろう。「百合と鳥とはそれを容易になすことができる」と。しかしそれに対する答えはこうである。汝は「しかし」と言うことを許されていない。——むしろ百合や鳥から、今日という日において汝自身に完全に現在的となることを学べ。そうすれば、汝もまた歓びとなりうるであろうと。しかし上述のように、決して「しかし」と言ってはならない。なぜなら、汝が百合と鳥より歓びを学ぶべきであるということは、真摯な事柄なのであるから。そしてなおさらのことであるが、百合や鳥があまりに単純であるというので、自ら勿体ぶって、汝が人間であることを感じ、また才智ぶり、また来るべき日々のことについて語り、そうして次のように言うことは許されていないのである。「百合や鳥は容易にそうすることができる。かれらは明日の日に悩むことさえ要しなかったのであるから。しかるに人間は単に明日の日について何を食うべきかを思い煩うのみでなく、昨日の日についても何を食べたか——そして支払いをしていないのだということについて、思い煩うのである」と。そう言ってはならない。不作法にも教示を妨げるような才智など弄すべきではない。そう

ではなくて、百合や鳥に学べ。少なくとも学ぶことを始めよ。なぜなら、百合や鳥を喜ばすもの、またそれに類するものは存在しているが、人間を喜ばせうるものは全然存在しないなどとは、だれも決して真摯に考えてはいないのであるから。それゆえ、汝がかつて生まれたこと、現に生きていること、また存在するのに必要なものを「今日」得ていること、詳しくいえば、汝がかつて生まれたこと、人間として生まれたこと、すなわち、汝が見うること、(汝が見うるということを考えてもみよ、)汝が聞きうること、汝が嗅ぎうること、汝が味わいうること、汝が感じうること、太陽が汝のために照り輝くこと、——そして汝のために、太陽が疲れると月が昇ること、それから星が光り始めること、冬となって自然がすっかり衣を脱ぎ、見知らぬ人のように装うこと、——そして汝を娯しませるために、春が訪れること、鳥が群れをなしてやって来ること、——そして汝を喜ばせるために、緑が萌え出ること、森が装いを凝らして花嫁のように現われること、——そして汝を喜ばせるために、秋が訪れること、鳥が去ってゆくこと、それは鳥が自分に重味をつけるためではない。ああ、そうではなくて、汝が鳥に飽き飽きしないためである。森は来る春のために装いを仕舞い込み、それによって汝は来る春にそれを喜びうること、このことは人を喜ばせうる何物でもないのであろうか。ああ、もし私が叱っていいのだったら！　しかし百合と鳥とに対する尊敬からそう言うことは許されていない。それゆえ私は、人を喜ばせうるものは取るに足らぬものであると言う代わりに、その代わりに、次のように言いたいと思う。もし人を喜ばせうるものが取るに足らぬものであるならば、人を喜ばせうるものは何も存在しないのであると。考えても見よ。百合や鳥は歓びそのものであるが——しかもそう考え

た場合にも――喜びうるものを汝よりはるかに少ししかもっていないのであって、汝は、その汝は、実際同時に汝を喜ばせることのできる百合や鳥をもっているのである。それゆえ汝の教師としての百合と鳥より学べ。存在せよ、今日存在せよ、そして歓びであれ。もし汝が歓びそのものである百合や鳥を見て、喜びを感じることができないなら、すなわち、汝がかれらを見て喜びを感じることができず、自ら進んでかれらに学ぶようにならないなら、汝は先生が子供について次のように言う場合と同じような事情にあるのである。「生まれつき才能がないのではない。その上、事柄はきわめてたやすいことなのだから、生まれつき才能のないことなど問題ではない。何か他の事情があるに違いない。――するとやはり十分に気乗りがしないというだけなのだろう。だからすぐさまあまりに厳格に考えて、善意の欠乏とか、あるいは反抗だなどと考えてはならないであろう」と。

こうして百合と鳥とは歓びの教師である。しかも百合と鳥とが実際にまた思い煩いをもっていることは、自然全体が思い煩いをもっているのと同様である。すべての被造物は、自己の意に反して服従しているはかなさのために、溜息を吐いているのではあるまいか。すべてのものは実際はかなさに服従している。星はそれがいかに堅固に大空に座を占めていようとも、実際最も堅固に座を占めている星でさえ、結局落下によってその位置を変える。そして今まで決して位置を変えなかった星でさえ、いつかは深淵に陥って位置を変えるであろう。そしてこの全世界は、その中に存在するすべてのものとともに、いつかは他の世界と取り替えられねばならないであろう。ちょうど人が衣服を脱いでそれを取り替えるように。全世界は誠にはかなさの餌食である。そして百合はすぐさま炉に投げ入れられ

るという運命を免れた時でさえも、あれやこれやの苦しい目にあったすえに、萎れなければならないであろう。そして鳥は長生きすることの許されている時でさえ、あれやこれやの苦しい目にあったすえに、愛する者と別れて、死なねばならないであろう。ああ、いっさいははかない。それがなんであろうとも、すべてのものはいつかははかなさの餌食となるであろう。はかなさ、はかなさ、それは溜息である。――なぜなら、はかなさの中には溜息を表わすものが、すなわち、不自由、拘束、幽閉が潜んでいるのであるから。そして溜息の内容は、誠にはかなさ、はかなさである。

しかもなお百合と鳥とは絶対的に喜んでいる。そしてここで汝は福音が、百合と鳥から歓びを学ぶべきだと告げるとき、それがいかに真実であるかをはっきりと知るのである。このように無限に深い思い煩いを担いながら、しかもなお絶対的に喜んでいて、歓びそのものである者にも優って立派な教師を、汝はとうてい望むことはできないのである。

いったい、百合と鳥とはいかにしてそれをなすのであろうか。奇蹟のようにさえみえること、すなわち、深い思い煩いの中にありながら絶対的に喜ぶということを、いかにしてなすのであろうか。そんなに恐ろしい「明日」が待っているのに、存在しているということ、すなわち、今日絶対的に喜んでいるということ、――それをかれらはいかにしてなすのであろうか。百合と鳥とはきわめて素朴にまた単純に振舞う。(百合や鳥はいつもそうするのである。)そして実際この「明日」を、あたかもそこに存在しないかのように、思い煩いもなく手に入れるのである。使徒ペテロの言葉があるが[9]、それを百合と鳥とは心に銘じているのである。そしてかれらは在るがままの単純さで、それを全く文字ど

おりに受取っているのである。――ああ、そしてかれらがそれを全く文字どおりに受取るというそのことが、かれらを救うのである。もしこの言葉が全く文字どおりに受取られるならば、その中には量りがたい力が存在している。もしそれが文字どおりに、全く定義に従って、受取られないならば、それは多かれ少なかれ力を失い、結局無意味な話術に過ぎなくなるであろう。しかしそれを絶対的に、全くの文字どおりに受取るためには、どうしても単純さを必要とする。「汝らのすべての思い煩いを神に投げよ。」視よ、それを百合と鳥とは絶対的に行なっている。絶対的な沈黙と絶対的な服従の助けを借りて、かれらは投げる――真に最も強い弩弓が何かを投げるように。そしてまた人が一番嫌いなものを投げ出すときのような情熱をもって――かれらのすべての思い煩いを自己のもとから投げるのである。しかもかれらは投げる――最も精確な銃の射当てる精確さをもって。また最も熟練せる射手のみが、射撃にあたっていだくような信念と信頼をもって――神にむかって投げるのである。その瞬間に――しかもこの瞬間は最初の瞬間からそこに存在しており、今日存在しており、その中にかれらが現に存在している最初の瞬間と同時的であるが――その瞬間にかれらは絶対的に喜んでいるのである。なんという驚くべき敏捷さであろう。すべてのかれの思い煩いをそのようにしかも一挙に捉えることができ、そして次にはそのように敏捷に投げ出して、しかもそのように確実に目標にあてることができるとは。実際、百合と鳥とはそれを行なっており、それゆえかれらは同じ瞬間に絶対的に喜んでいるのである。そしてそれは全く当然のことなのである。なぜなら、全能者なる神が、全世界と全世界の思い煩いを、（百合や鳥の思い煩いをもまた、）かぎりもなく軽々と担っていい給うからであ

る。なんという言いがたい歓びであろう。それはすなわち全能なる神への歓びである。

（1）〔訳注〕ペテロの第一の手紙五の七。

それでは百合と鳥より学べ。その絶対的なるものの敏捷さを学べ。おそらくそれは驚くべき秘術であろう。しかしそのゆえにこそ汝はいっそう入念に百合と鳥とに注意せよ。それは驚くべき秘術であり、しかも柔和という秘術と同じように矛盾を含んでいる。あるいはそれは矛盾を解く秘術であるともいえる。「投げる」という言葉は力の使用を思わせる。ちょうど人が全力を集中し、異常な努力を傾けて――すなわち、力を尽くして思い煩いを投げ出さねばならぬ時のように。しかも、しかも「力」は全く使用すべからざるものである。使用さるべきものは、しかも絶対的に使用さるべきものは、――「従順」である。しかもなお人は思い煩いを投げ出さねばならないのである。そして人は「すべての」思い煩いを投げ出さねばならないのである。もし人がすべての思い煩いを投げ出さないなら、思い煩いの多くを、あるいは或るものを、あるいはそのごく少しのものを残すこととなり、人は喜べなくなるのである。いわんや絶対的に喜ぶことなど思いもよらないのである。そしてもし人が思い煩いを絶対的に神に投げかけないで、どこか他のところに投げかけるなら、人は思い煩いを絶対的に逐い払うことにならないであろう。すなわち、思い煩いはあれやこれやの方法で、再び忍び寄り、しかもしばしばいっそう大きな、また辛い思い煩いの姿で忍び寄るのである。なぜなら、自己の思い煩いを自己のもとから――しかも神よりも外のものに向かって投げ出すことは、それは「気散じ」にすぎないからである。しかるに気散じは思い煩いを消すための疑わしく曖昧な手段にすぎない。それに反

してかれのすべての思い煩いを絶対的に――神に向かって投げることは、それは集中であり、しかも（実際、この矛盾の秘術はまことに驚くべきである。）それによって汝がすべての思い煩いを絶対に脱するところの集中である。

それでは百合と鳥について学べ。汝のすべての思い煩いを神に投げよ。しかし汝は歓びを投げ棄ててはならない。反対に汝は全力を傾け、力を尽くして歓びを固く保たねばならない。汝がそうするならば、汝にはいつも或る歓びが残る勘定になることは必定である。なぜならもし汝がすべての思い煩いを投げ出すなら、実際あとには喜ばしいことのみが残るからである。しかしそれではまだ十分ではない。それゆえもっと百合と鳥とについて学べ。汝のすべての思い煩いを百合や鳥のなすように、すべて絶対的に神にむかって投げよ。そうすれば、汝は百合や鳥のように絶対的に喜ぶにいたるであろう。神の全能を崇めること、それがすなわち絶対的歓喜である。全能者なる神はそれによって汝のすべての思い煩いを、無きがごとくに軽々と担い給うのであるから。そしてまた崇めつつ「神汝のために慮ばかり給えり」ということを信じうるのは、それはまた絶対的歓喜であり、それにすぐ付随することである。（実際、かの使徒はそれを付け加えたのである。）絶対的歓喜とはまさしく神による歓びである。すなわち、汝は神によって神の中でいつも喜んでいることができるのである。汝が今ここで絶対的に喜ぶことをしないならば、過誤は絶対的に汝にある。すなわち、汝のすべての思い煩いを神にむかって投げかけるのが拙劣であることに、それをなさんとする意志の欠けていることに、汝の我意の中に、過誤は潜んでいるのである。簡単にいえば、汝が百合や鳥のようでないということに過誤

があるのである。百合と鳥とがそれについては教師となることができず、従ってここではわれわれの問題とならない思い煩いは、ただ一つあるにすぎない。それは罪についての思い煩いである。他のすべての思い煩いについては、次のことが妥当する。すなわち、もし汝が絶対的に喜ばないなら、それは汝の罪責であり、汝が絶対的な沈黙と服従の中で、神によって絶対的に喜ぶようになることを百合や鳥より学ぼうとしないことに基づくのである。

しかしなお一つのことが残っている。汝はおそらく「詩人」とともに言うであろう。「実際、だれかが鳥のもとに家をつくって住むことができ、鳥がその妻とともに棲んでいるか、さもなければ、全然交わりもなしに棲んでいる森の寂寞の中に、ひっそりと住むことができるならば、あるいはだれかが百合がただ一人で、全然交わりもなしにいる野の平和の中で、百合とともに住むことができるなら、そのときには人は容易にすべての思い煩いを神にむかって投げ、そして絶対的に喜んでいることも、あるいは喜ぶようになることもできるでもあろう。なぜなら、《社会》、この社会こそ不幸の種なのであるから。人間は、社会についての、そしてまた社会の幸福についての不幸な妄想を生み出し、自己をも他をも苦しめる唯一の存在であり、そして社会との交わりがしだいに大きくなって、自己も他もだんだん腐敗するようになればなるほど、ますます自己をも他をも苦しめる唯一の存在であり、それが不幸の種なのである」と。しかしそれにもかかわらず汝はそのように語ってはならない。そうではなくて、もっとよくその事情を観察せよ。そして羞いながら告白せよ。思い煩いにもかかわらず、もともと言いがたい愛の歓びが存在していて、その歓びをもって鳥は、雌雄の鳥は、夫婦になっている

のだということを。そして思い煩いにもかかわらず、独身の自足した歓びがあって、それを懐きながら百合はただ独りでいるのだということを。すなわち、もともとこの歓びが存在していて、それは社会との交わりによって妨げられないようにできているのだということを。——なぜなら、社会はそこにもまた実際存在しているのであるから。事情をもっとよく観察せよ。そして羞いながら告白せよ。もともと絶対的沈黙が存在し、かつまた絶対的服従が存在していて、それによって鳥や百合は神のことを絶対的に喜んでいるのだということを。——すなわち、絶対的な沈黙と服従とがもともと存在していて、それによって百合や鳥は、孤独においても社会の中においても、同じように絶対的に喜んでいることができるのだということを。そのように汝は百合と鳥より学べ。

そしてもし汝が完全に百合や鳥のように成ることを学びえたならば、ああ、そして私がそれを学びえたならば、そのときにはあの願い、すなわち、（それは実に喜びに喜んで、否、絶対的に喜んで祈るすべての真実なる祈りにとって模範的なものであるが、）結局何物をも、それ以上乞うたり渇望したりすべき何物をももたず、絶対的に喜んで称讃と崇拝の中に終わる「あの祈り」の中の最後の願い、「国と力と栄えとは汝のものなればなり」という願いが、汝にも私にも真実となるでもあろう。しかり御国はかれのものである。それゆえ汝は絶対的に沈黙しなければならない。そうすることによって、汝は、汝がそこにいることを目障りにならないようにし、むしろ絶対的な沈黙の荘厳さを通して、御国はかれのものであることを表わすことになるのである。そして力はかれのものである。それゆえ汝は絶対に服従し、すべてにおいて絶対服従的でなければならない。なぜなら、力はかれのものである

からである。そして栄光はかれのものである。それゆえ汝は汝の行なうすべてのことにおいて、かつまた汝の蒙るすべてのことにおいて、絶対的になお一つのことを、すなわち、神に栄光を帰するということをなさねばならない。なぜなら、栄光はかれのものであるからである。

ああ、絶対的歓喜、国と力と栄光とは永遠に神のものである。「永遠に！」視よ、この日は、永遠なるこの日は、それは決して終わりをもたない。それゆえ、国と力と栄光とは永遠に神のものであるということを絶対的に固守せよ。そのとき汝のために決して終わることのない今日が、その中で汝が汝自身に永遠に現在的であり続けることのできる今日が、存在するのである。そのとき大いなる顚覆によって天は崩れ、星の位置は変わらば変われ。鳥は死し、百合は凋まば凋め。しかも汝の崇めつつ味わっている歓びは、その歓びの中にある汝は、それらは今日すでにあらゆる没落を越えて生き延びるのである。考えてもみよ、（たとえ、そのことが人間としては汝にさしたる関係はなくても、キリスト者としての汝には関係のあることであるが、）キリスト教的には死の危険さえも、汝に対しては全く言うに足りぬことなので、「汝、今日パラダイスに在るべし」[1]と言われるということを。従って時間性より永遠性への移行（極度に大きな距離である！）は、きわめて迅速に進行するので、——そしてその移行が他のすべてのものの没落を通して行なわれるはずであるとしても、しかもなおきわめて迅速に進行するので、汝は実際キリスト教的には、神の中に止まっていることによって今日すでにパラダイスにあるのだということを。なぜならもし汝が神の中に止まるならば、そのときには汝が生きようと死のうと、汝の生ける間に汝の望みが遂げられようと、妨げられようと、汝が今日死のうと、

七十歳に達した後にやっと死のうと、そして汝が海の藻屑と消え、しかもそこが海の最も深い場所であろうと、あるいは汝が空中に飛散せしめられようとも、しかもなお、汝は神の外に出ることなく、従って汝は汝自身に現在的に神の中に止まり、そのために汝の死の日においても、今日すでにパラダイスに在るのである。鳥と百合とはただ一日を、しかもきわめて短い一日を生きるにすぎないが、それでもなお歓びに充ち溢れている。それは上に説明されたように、かれらが正しい方法で今日あるがゆえであり、この今日において自己自身に現在的であるためである。そして汝に対してはこのうえなく永い日が与えられており、今日生きるということ、——しかも今日パラダイスに在るということが許されているのであるから、汝は絶対的に喜んでいるべきではあるまいか。そればかりではなく、その汝は、それを実際なしうるのであるから、歓びにおいてほんとうに鳥をはるかにはるかに越えるべきはずである。その確信は、汝がこの祈りをなすたびごとに、いっそう大きくなるであろう。そしてこの喜びの祈りを心の底より祈るたびごとに、汝はそれに近づいているのである。「国と力と栄えとは汝のものである——永遠に。アーメン。」

（1）〔訳注〕ルカによる福音書二三の四三。

第二部

『野の百合・空の鳥』

久山　康

キルケゴールの著作の中では、かれが匿名で書いた書物が主著として注目され、かれが自己の本名で著わした教化的あるいはキリスト教的講話は、あまり関心をひかないできた。ことにキリスト教の地盤の浅い日本では、キルケゴールも実存主義の一つの源泉として哲学的に興味をもたれることが多かったので、その傾向が強かったが、しかしその傾向は、ラウリーの伝えるように、日本に限られたものではなく、キルケゴールの生前デンマークにおいてすでにそうであって、キルケゴール自身、「私は右手で教化的講話を差し出し、左手で美的諸著作を差し出した。――そしてすべての人は、右手で私が左手にもっているものを摑んだ」と嘆いたし、キルケゴールの著作が最も勤勉に研究されてきたドイツにおいてさえ、講話の飜訳は緩慢にしか行なわれなかったのである。しかし匿名の著作が「間接伝達」の形をとっているのに対して、講話は「直接伝達」の形をとっているため、キルケゴールの思想に対して特殊な照明を与えるものであり、講話はかれの宗教思想を伝えるだけでなく、匿名の著作の理解のためにも欠くことのできないものであることは言うまでもない。ことにこの講話の数が全部で八十六に達し、しかもそれらの多くが匿名の作品との秘められた連関をもって書かれていることを思えば、講話を無視したキルケゴール理解が、一面的なものとなることは必然であると思われる。従ってこのことは近来強く自覚されて、各国で講話の飜訳が進められてきたのである。

ところで、これらの講話において表現されたキルケゴールの思想的立場については、ラウリーが次のような注目すべき言葉を述べている。

「宗教哲学に対してキルケゴールの行なった重要な寄与の一つは、かれが『あとがき』でなしている宗教性AとBとの間の、すなわち、内在性の宗教と特にキリスト教的な罪の意識によって特徴づけられている超越性の宗教との間の区別である。キルケゴールがかれの『教化的講話』を宗教性Aに数え入れていることに、最初人は驚かされるかも知れない。というのは、それは人の聴く多くの他の説教よりもずっと純粋にキリスト教的であるのを、人は認めるからであり、後になってキルケゴールが講話に巧みとなればなるほど、いっそう明確にキリスト教的となったのであるからである。しかしやはりそうなのである。すべての匿名(アンチ・クリマクスを除いて)が、キルケゴール自身のすでに越えた立場を反映しているのに対して、講話においてのように自分の本名で書く場合には、キリスト者に成るということの途上で、かれがその時々に到達した立場を正確に言い表わすように細心の注意を払ったのである。というのは、かれが実際にはまだ獲得していない結果を、あるいは《二重反省》によって個人的に自分のものとしていない結果を、自分で誇ることのないように細心の注意を払ったからである。これは自分の思っている以上のことを言おうとする誘惑に実際いつもさらされている説教家たちに推薦さるべき誠実さの一例である。」

アンチ・クリマクスを除いたのは、その匿名がかれの立場よりも高いキリスト教の立場に使用した匿名であったからである。「かれ自身に関しては、キリスト教が本来何であるかということの把握において、かれが最高の地点に到達したときにおいてさえも、かれはそれを自分の生活の中にまだ適切に表現しえていないということ、従って――かれがその信仰のために死ぬるに至るまでには――まだキリスト者になっていないということを、謙虚に認めたのであった」とラウリーは記している。かれの真摯な信仰態度が知られるのである。

講話の中でもここに訳出した『野の百合・空の鳥』に関する二篇の講話は、キルケゴールの透徹した信仰と強靱な思索力と、そして天才的な文学的表現力とが渾然として一つとなった名品であって、読む者をしてかれの言葉の真実が心に沁み透り、信仰への径が眼前に浮かび出てくるのを感ぜしめずにおかないものである。

二篇の中第一部は『三つの敬虔なる講話』と名づけられて一八四九年に著わされたものであり、第二部は一八四七年に著わされたものである。いずれも「山上の垂訓」の中のイエスの指示に従って、野の百合と空の鳥を人間の正真正銘の教師として受け取り、それに人生の道を徹底的に学ぼうとしたものである。この二篇の講話の間には一八四八年の春に出たキリスト教講話があって、その第一篇の『異邦人の思い煩い』は、やはり野の百合と空の鳥に学んでの人生の反省である。キルケゴールはその三年間特に強く聖書のこの個所に捉えられて、虚心担懐にイエスの指示に従うことが、どのように深い生命の泉を穿つものであるかを体験したに違いないが、それにしてもイエスの短い言葉から、これだけ深く豊かな思索を展開することのできたキルケゴールの天才に、驚嘆せずにはおれない。

年代順に第二部の方からかれの論旨を顧みておこう。それは三つの節から成っていて、第一節は人間であることに満足することを、百合と鳥から学ぶことを内容としている。労せず紡がないにもかかわらず、栄華を極めたソロモンでさえその装いがその花に及ばないように美しく花開く野の百合を正視し、播かず刈らず倉に収めないにもかかわらず、十分に養われている空の鳥を直視することによって、その背後に百合を育て鳥を養い給うている神の摂理を見いだし、これに驚嘆するとともに、その同じ神に養われている人間存在の素晴らしさを自覚して、人間であることに満足するようにさせようとするのである。しかし人間がこの根本的な人間の在り方に気づかず、それに満足を見いだしていないのは、人間が相互の比較によって、自己の不幸に思い煩うからである。そ

こでキルケゴールは、自分の美しさを忘れて、最も美しい百合に成ろうという思い煩いの中で亡びた一本の哀れな百合や、毎日何不自由なく養われていることを忘れて、将来の生計の保証されている家鳩を羨み、それに成ろうとして殺された一羽の哀れな山鳩の物語を作り出して、人間の陥っている思い煩いの虚しさを明らかにする。そして人間であることに満足するとは、自己が被造物であることに、つまり、自己自身を自らの手で創造することも維持することもできぬ被造物であることに、満足することであるとする。神を忘れて、自分で自己自身を装い養おうとするところに、思い煩いが起こるのである。自己の富に依存していること、それが隷属であり、苦渋な奴隷状態であって、神への隷属が唯一の独立であると、かれは説くのである。

次の節においては、人間であるということの素晴らしさが明らかにされる。それは人間が神の似姿として造られていることに表現されているとされる。百合がいかに美しくても、神に似てはいないのである。そして人間が神に似るのは祈りにおいてである。支配することによって神に似ようとするならば、人間は神を忘却することになるのである。そして人間が神に似ていることは、意識を所有していることに現われている。意識において永遠的なものと時間的なものとが触れあっているのであり、思い煩いの起こるのも意識があるためである。従って思い煩うことができるのは、人間の完全性を示すものであるともいえるのである。それによって人間は神とともに働くことができる。鳥に不可能な神の協力者であることは素晴らしいことである。かれはこのように説くのである。

第三節においては、人間に約束されている浄福が問題とされる、それは人間に自由な選択が許されていることに基づいており、正しく選ぶことによって実現される。人間は神と富とのいずれかを選択しなければならず、まず神の国とその義とを選ばなければならないのである。そしてそのとき人間にはすべてのものが与えられるので

ある。

この講話に比するならば、二年後に著わされた第一部の講話は、思索がさらに透徹し、表現も自在をきわめ、印象もいっそう鮮烈であり、完璧という言葉を思わせるほど立派なものである。従って私は、まずそれを読んだ上で逆に二年前に書かれた講話を読まれるのがよいと思う。ところでキルケゴールはこの第一部の講話において、野の百合と空の鳥から沈黙と服従と歓喜を学ぼうとするのである。

第一節においては、「先ず神の国とその義とを求めよ」という聖句が問題とされる。しかしそれは職を求めることでも、貧しい人々に持ち物を与えることでも、伝道におもむくことでもなく、神の前に無となること、つまり、沈黙することだとされるのである。これは人の意表を衝く鋭い認識であるが、それに続いて語りうることは動物に対する人間の優越点であるが、それは容易に腐敗することを説く。そして超越者である神と人間が語りうるのは、畏れとおののきの中でのみであり、しかも畏れとおののきは声を殺して、人間を沈黙させてしまうものであることを明らかにする。正しく祈る者はそのことを知っており、こうして祈りは沈黙に帰着し、さらに傾聴に深まるのである。キルケゴールはこの沈黙することを戸外の百合や鳥のもとで学ぶことができるとするのである。苦悩のときにも鳥や百合は沈黙している。ところが人間の苦悩がそれらの苦悩に較べて非常に恐ろしく見えるのは、人間の語りうるという不確実な優越点のためである。沈黙している百合にとっては、苦悩はそれが在るがままにとどまっているが、人間は語ることによってそれを無際限に大きくしてしまうのである。戸外の百合や鳥のもとにある沈黙は、神への畏敬を表わしているが、それが畏敬であればこそ、沈黙は荘厳なのである。そしてこの沈黙を人間が学ぶとき、人間は一個の被造物として自己を創造の秩序の中に定位させることができ、そのときには自己の名をではなく、「御名を崇めさせ給え」と祈り、自己の計画の実現ではなく、「御国

を来らせ給え」と祈り、自己の意志ではなく、「御心を成らせ給え」と祈るに至るのである。かれはこう論旨を進める。

第二節では戸外の百合と鳥のもとにある沈黙の中には、「あれか、これか」が存在していることがまず言われる。それは「神か、それとも」という選択である。すべてのことにおいて絶対的に神に与するか、それとも神を軽んじるかという寸毫の妥協をも許さぬ二者択一である。沈黙は神への絶対的服従の第一条件である。自然においてはすべてが絶対服従である。そのために自然では神の意志がただちに成るのである。例えば、百合はどんなに不幸な場所におかれていても、従順に自己の運命に服従して、美しさの限りを尽くして花咲くのである。百合や鳥は服従以外の他の何事をも為しえないからそうするのだといわれるかも知れないが、そう言わないで、人間は必然性から徳を作り出すことに成功すべきだとかれは説くのである。動かすことのできぬ神の意志に、絶対的に服従して行為することによって、必然性から徳を作り出すように努力せよと説くのである。そして「あれか、これか」の決断を迫り給う神が、自らを「忍耐の神」と称せられるのは、人間が不従順だからであるが、しかし百合と鳥に対して父なる創造者であり、支え主である神が、人間に対してのみ忍耐の神であり給うことは、筆紙に尽くしがたい慰めであることをかれは明らかにする。しかしそれは同時に恐るべき責任を有する慰めであり、神の忍耐を虚しくするなら、神を軽んずることになるとキルケゴールは誡めるのである。

第三節においては、百合と鳥とが歓びの教師として注目されている。かれは、歓びを教えるのに最も良い教師は、自ら喜んでいる者であるとして、鳥と百合の歓びを実に美しく描き出しているのである。そして鳥や百合は絶対的無条件的に喜んでいて、歓びそのものに化していることが指摘される。それはかれらにとって明日に対する思い煩いがないからである。沈黙と服従を守るかれらには、今日という日が存在するのみで、明日は存在しな

いのである。明日という不幸な日は、饒舌と不従順が見いだすだけなのである。歓びは人が真に自己自身に対して現在的であるとき訪れるのであり、それは沈黙と服従の中で、今日存在するということであるという深い真理が明らかにされるのである。しかしもちろん自然にははかなさが支配しており、世界はその餌食だといえる。しかるになお百合と鳥は絶対的に喜んでいる。それはなぜかというと、かれらが「汝らのすべての思い煩いを神に投げよ」というペテロの言葉を、絶対的に実践しているからであると言われる。そして「神汝のために慮ばかり給えり」ということを信じているからだとされる。従って絶対的歓喜とは神による歓喜なのである。そしてそのとき、「国と力と栄えとは汝のものなればなり」という祈りが自分のものとなり、「汝、今日パラダイスに在るべし」ということが真実となると、キルケゴールは説くのである。

キルケゴールの講話の論旨の展開の荒筋をたどっていて感じることは、それが日本人にとってことに感銘の深いものであることである。というのは、そこに示されている自然を師として生きることは、日本人の伝統的生き方でもあるからである。「山河の親切にわが知なくば、一知半解あるべからず」とか、「正修行のとき、谿声谿色、山色山声、ともに八万四千偈をとしまざるなり」という道元禅師の言葉や、「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」とか、「風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす」という芭蕉の言葉を思い浮かべるとき、その説き方は異なっていても、東西の宗教思想の自然観に共通したもののあることを感じさせられて、興味をそそられるのである。

飜訳のテキストとしては、第一部は Christliche Reden; übersetzt von W. Kütemeyer und Chr. Schrempf, 1929, 第二部は Was wir lernen von den Lilien auf dem Felde und den Vögeln unter dem Himmel; übersetzt von Alfred Puls, 1891 を使用した。後者はかなり自由な訳であることが序で断

わってあるが、スウェンソンの英訳と照らし合わせてみたところ、ごく一部の省略はあるが、よく一致していて放恣な訳でないことが判明した。そこで私はそれを参照するとともに、「序」をはじめ省略されていた部分も一部補っておいた。

なお訳出にあたっては、西谷啓治先生の御教示を得たことを記して感謝したい。

キルケゴール著作集 18（全21巻別巻1）

定価 八〇〇円

一九六三年一二月二五日第一刷発行
一九七一年八月三〇日第四刷発行

訳者 © 田淵義三郎 久山康

発行者 寺村五一

印刷者 白井倉之助

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京 (291) 七八一一(代)
振替 東京 三三二二八
郵便番号一〇一

精興社印刷・松岳社製本

(分)1310(製)32880(出)6911